

---

# アリアドネの銀弾?【発端】

ariginnda

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アリアドネの銀弾？【発端】

### 【Zコード】

Z5464Y

### 【作者名】

arioginnda

### 【あらすじ】

「発端は・・・『奴ら』との出会いだったんだ・・・」

空手の個人戦で、全国王者を破つたご褒美に、マジカルランドに友里を連れてきた一真。

ただ単に楽しい日で終わるはずのその日に、「ミステリーハウス」で殺人事件が発生した。

その捜査を宇佐美と共にすると、その捜査中に一真の田に黒い影がちらつく・・・。

「アリアドネの銀弾」シリーズ第三弾－長き「序章」が終わりを告げ、「発端」へ・・・。

「ああ、狩らせてもうおつか。」の謎の悪意を・・・。」

## STAGE 0

「一真・・・遅いなあ」  
仁舞市にある最も大きなテーマパーク、「マジカルランド」での入り口のゲート前で、小野沢友里は腕時計を眺めて、その後ふうつと細い息を吐いた。

黒にほんの少しご茶色がかかつた髪型で、後ろ髪から下向けて短いあほ毛が垂れているのが特徴の少女だった。今日はホットパンツに黒色のスパッツを履き、白いノースリーブの服の上に、黄色っぽい半そでの服を着込んでいた。そんな彼女を待たせているという少年は、集合時間から十分も遅れているというのに、一向に来る気配がない。どこかで道草食ってるか、家でゲーム三昧の状態だろう。その後友里は辺りを見渡して、その少年がどこにいるか探した。

すると、向こうから白いTシャツの上に赤いチェックのシャツを着て、ジーパンをはいている少年がポケットに手を突っ込みながらやつて來た。癖のある髪型（例えるならば寝癖）に、整った顔立ち、いつもかけている伊達眼鏡が印象的な少年、桐ヶ谷一真きりがやかずまが友里の方へ向いて、その後大きく欠伸をしながら友里の方へ歩み寄ってきた。友里はちょっと口元で笑いを浮かべて、その後笑顔を消して頬を膨らませてぷいっと一真からそっぽを向いた。一真是顔をゆがませて、頭に疑問符を浮かべた。

一真が友里のすぐ近くに寄ってきた。

「どうした？ 何で怒ってるんだ？」

「怒るも何も、遅い」

「・・・・・」

一真是黙り込んだ。友里の耳に溜め息が聞こえた。都合が悪くなつたり、考えるのも面倒くさいと思つたときに溜め息を吐くのが一真の癖だ。

「悪い・・・」

「へ？」

思いのほかの台詞！？一真が素直に謝った。これはこれで大きな進化の一歩だ。

「お前が暴れだす前に来ることができなくて」

「もう少しだ！」

ビュンッ！と、言つ風を切る音と共に、弾丸並みのスピードを持ったパンチが友里から炸裂した。素直に謝ったと思つたら、まさか毒舌の一つとは思つてもみなかつた。

普通なら顔面に直撃して一真の体は中一飛びはずだがあろうことか彼は目を閉じたまま首を傾けてそのパンチをかわした。さらに、ビンッと伸びきつた友里の腕を一真が掴んで、しかもなかなか離れない。もう一波を防ぐためだつた。

しばらくしてから一真はパツと友里に腕を話した。相変わらずやることは憎たらしく。

友里はゆつくりと自分の腕を引き寄せ、頬を膨らませた。しばらくしてから、頬を縮ませて、笑いを浮かべて、一真の腕を掴んだ。しかしあつぱりこれ以上怒ることは出来なかつた。今日は怒りたくない。

「行こ、一真！」

「お、おい」

友里は一真を引っ張りながら入り口のゲートの中へ入つていつた。

せつかく一人つきりで遊園地に遊びに来たのだから、そんな日ぐらい楽しみたい。

## STAGE 1

やばい・・・もつそろそろ俺の今回の所持金がピンチだ。それでもジヨット「コースターはまだどう?お化け屋敷まだどう?観覧車まだどう?奇跡と光の城のナイトシアターもまだどう?・・・・・数えだしたらキリが無い。しかも、友里の奴・・・まだ遊び足りていないようだ。おいおい、冗談じゃねえぞ?俺の財産が破綻するわ!

「ねえ一真、次あれ乗ろうよ!」

と指を指したのは「ゴールドスプラッシュコースター」俗に言う、ジエットコースター。たしか、「コナン」じゃこういう乗りで殺人事件があつたんだよなあ・・・俺とコナンは何かと境遇が似てしまっているからもしかしたらもしかしたらのパターンかもしない。とか何を思つてんだかと言う事を思い浮かべながらも俺の腕は、友里に引かれて連れられていった。もう・・・俺の金が死ぬんですが?

「次の方どうぞ!」

女のスタッフの人が二コ二コ笑顔でコースターの座席へと導くよう手をやつた。そのスタッフに俺と友里は導かれるように隣同士になつて座つた・・・いや、正確に言うと友里の強権発動で無理やりそうさせられた。友里曰く、「カツプル同士なら金額は少々安くなる」だそうだ。友里がわくわく表情で辺りを見回して、その後その表情を全く変えずに俺のほうを見てきた。

「楽しみだねえ。これって、つい最近できただばかりのアトラクションでしょ?」

「そう・・・だけ?」

そういえばそうだったなあ。これもまた父さん達が働いた血税で

仁舞市が総力を挙げて作り出したビッグコースターだ。あろう事が、世界で一番コースが長いだけのジェットコースターが出来上がつてしまい、ギネス認定の際には総理大臣までもお出し、そして全国放映ネットのテレビ番組まで出てきてとんでもない大人気。挙句の果てには製作に使った費用よりも、このアトラクションによつて儲けた費用が桁違ひな額で超え、このマジカルランドはウツホウホ状態だという。血税で大儲けした一例を持つテーマパークだ。

「ねえ一真……」

「ん？」

「手……握つていい？」

「…………？」

俺が首を傾げると、ジェットコースターの座席の上においてある俺の手に、友里の手が重なつた。そして、あろうことかそれを強く握つてきた。

痛たたたた……。痛いつて！改めて言つてやるわ。この小野沢友里という少女は普通の女の子ではない！見た目はともかく、こいつは全国の空手の女王だ。パワーは理屈抜きで想像を絶する。俺だつて一発食らつただけであばらが持つていかれたことがある。少なからず、それがいまだにトラウマになつていることは言うまでもないが……。

「…………ッ！？」

なんか視線を感じる……。何だろう……この冷たい視線は……。そう感じつつも、ジェットコースターは発進していく……。

「うう……見ていない間にい……私が見ていない間にい……！」

少女の体が震えている。腰まで伸びた黒い髪にアホ毛が一本伸びていて、身長に至つては一五〇在るか無いかのギリギリのラインの

どう見ても幼児体型。こげ茶色の瞳を持つたその少女は、ジエットコースターで隣同士に座っている二人の男女を見て歯軋りした。

『Hリー？ 姦いでるのカイ？』

別世界接続端末

腕にはめている携帯端末、PLD（Parallel Link

Device）の無線から男にしては高い声調の声が聞こえた。

馬鹿口調もついでに・・・。この声はいつも聞きなれている。それが分かったから、Hリーの顔が真っ赤に紅潮していく・・・。

「べ、べべ別にそんな訳無いでしょ！ あいつはただ単なる観察対象で、監視対象で・・・馬鹿言わないで！ ジュール・・・」

『そんなに必死にならなくても・・・。じゃあ何でキミはこんなところまで力ズマをつけていたんだい？』

ズバツと来る一撃必殺の言葉！ 出番が早い！ 予想外のこの一言にもさすがにエリーも言葉を失う。エリーの体がフルフルと震えた。

「うるさい！ 黙れ！ しゃべるな！」

『ハイハイ。うるさいよネ、ボク。ゴメンネ、ゴメ・・・』  
ブツンッ！ エリーから一方的に無線を切った。

（そういえば何でだろう・・・）

何で、自分はこんなことをしているのだろう・・・。Hリーはそう思つて、俯いて考え込んだ。

「そういば・・・」

「ん？ 何？」

「新一もこんな風に思つてたのかな・・・」

「何の話？」

「ん？ なんでもない・・・。独り言・・・」

俺はいつの間にやら独り言を呴いてしまつたようだ。ちょっと気を抜くとすぐ思ったことを独り言として呴いてしまう。悪い癖だな、俺の。

俺がぼおつとしている間に友里が強く俺の手を握ってきた。だから・・・痛いつて。

「き・・・」

「ん?」

何か言つたか?」いつ。と思つた瞬間だった。気づいたら頂上に来ていたようだ。

「おお?」

そして、耳に「ゴオオオオオオツ!...」という爆音」とき音とともに、俺の体がとんでもないGに潰されるような感覚に見舞われた。

「きやああああああああああああああ!...!」

そして、俺の隣からとんでもなく大きな友里の絶叫が聞こえた。耳が痛つたい!! 理屈抜きで痛い!

しばらく・・・と言つたら嘘になるが、始まって十秒ぐらい経つてから、辺り一面が光の湖に飲まれるようなエフェクトが発生した。しかし・・・。

「きやああああああああああ!」

隣から聞こえる友里に絶叫と、体がGに押しつぶされる感覚、レベル上を爆走する「ースターによつて聞こえる爆音」ときの風の音のせいで、全然何があつたのかが分からない。つて言つたか、詐欺だ。・・これは。何が「光の海に漫かつて豪快な世界最長のジヒツトコースターに乗ろう!」だ。襲つてくるのはエンレス的に続く気持ち悪い感覚だ。あくまで、俺感覺だが・・・。いつまで続くんだろう・・・なんて事思つてるほどの余裕なんか俺には無かつた。とりあえず早く終われと思つていた。

「ツツツツ!...!」

絶叫すり上げられない。隣では「きやああああああああああ!」とか友里が楽しそうに絶叫を上げていた。俺はできない。体を反らせたせいで、Gによつて肺が押ししづぶされるような変な感覚のせいで。呼吸はできるのに、声が出ない。ずっと走り続けて、その後急に止まつたときのあの感覚がちょっと強くなつたように感じられる。

にしても、長い！理屈抜きだ！早く終わってくれよ！

ガタガタ・・・とコースターがゴールにたどり着き、最後にプシコーンという音共に白煙を上げるという、盛大な演出が現れ、ようやく完全に停止した。

「うぐぐ・・・楽しかったね」

友里がジェット「スター」から降りて背伸びして、俺に向かって微笑みかけてきた。。

「・・・・・ああ」

ああ、疲れた。今日一日の中で一番疲れた気がする・・・。期待はずれだな、これは。スタートしてから三十分と言つジェットコースターにしてはとんでもなく長い時間乗車しつ放しだつたな。いくらなんでも長すぎるんだよ・・・。俺としては、あんまり面白くなかった。もう少しぐらい短くしろよ。・・・俺主觀だけど。

「ねえ、次どれ行く？」

「まだ遊ぶのかよ」

「そりやそりやなあい。今日は一真の一〇〇%奢りなんだから」「・・・・・」

今日ほど友里のことをムカつくと思ったことはない。いくらなんでもやりすぎだ。限度を弁えてくれよ。俺を殺す気か？こいつ。傍若無人だなあ、今日のこいつ。まあ、いつも俺はこいつに滅茶苦茶言つてるからそれの鬱憤をこの期に晴らしているんだろうな。

俺は腕時計を見た。もう気づけばもうすぐ六時だ。でも、今は六月の下旬だ。まだまだ充分明るい。

「そうだー早く行かねえと間に合わねえ。こつちだこつち

俺はそういうて、友里の手を引いた。今度は全くの逆パターンだ。

「へ、へ？」

友里は俺の行動の意図のわけも分からず俺に手を引かれていた。

そういえばなんだろ？・・・この冷たい視線は・・・。そもそも俺のメンタルが持たんぞ？

マジカルランドに一台の車が止まつた。漆黒のボディーを持つフエラーリFFだ。二〇一一年に発売されたモデルで、当時価格では三一〇〇万円だったやつだ。その車から一人の男が降りてきた。遊園地に男一人というのはなかなか不自然な物だつた。しかし、ここには遊びに来たというわけでは無い。その理由は誰にも気づかれてはいけない。悟られてもいけない。サングラスをかけたゴツゴツとしたがたいの男がポケットから携帯を取り出してダイヤルを押した。すぐ横では黒いトレントコートにハイネックの服を着た、上から下まで黒ずくめの服装をしており腰辺りまで伸びているホワイトシルバーのロングヘア、身長は一九〇超えているだろう。その男はタバコを噴かせて、自分の車にもたれかかりポケットに手を突っ込んでいた。

「ああ、分かつてるな。夜の十一時に例の場所で落ち合おうぜ。  
・  
・  
・  
・  
・  
ああ、そこは手を抜かんぢやいねえよ。心配すんな。Z  
INEのアニキも同行だ。俺達はジェットコースターからお前の位  
置を把握させてもらう。来てなかつたら最期だからな。  
ああ、じゃあな。また落ち合おうぜ」

そういうてゴツゴツ体型の男の方は携帯の通話を切り、パタンッ  
と携帯を折りたたんでポケットに突っ込んで、ホワイトシルバーの  
ロングヘアの男の方へ振り向いた。

「アニキ・・・」

その声と共に白銀のロングヘアの男は車から離れた。その男のタバコを銜えた口元が吊りあがつた。

「ん?」

建物の上から二人に男女を監視しているエリーは何かの気配を感じ

じた。背筋がほんの少し冷たい。寒気が一瞬走った。エリーはその感触を感じ取り、辺りをキヨロキヨロ見渡した。

『どうしたんダイ？ エリー・・・』

「ん？ 嫌、なんでもない・・・」

エリーはジュールの声に対し、静かに答えた。その後、顔を俯かせ考え込んだ。何故か動悸が止まらない。

(何だろう・・・この感じ、どこかで・・・)

エリーは下を見下ろし、下を見渡した。

そして、黒ずくめの服装をしたホワイトシルバーのロングヘアーケーブルをした男の姿に目が止まった。

「ツ！」

息が詰まる。体が、必死で逃げると命令し続けていた。エリーは目線を外し、後ろに倒れこんだ。体が震える・・・。恐怖に精神を支配されていく・・・。

(何・・・で？ 何で・・・彼がいるの？)

嫌だ・・・。エリーが一番会いたくなかった男だった。何で、こんな所にあの男が？ と言つてしまざまな感情がドッと流れ込んできた。エリーは恐怖の感情を殺して、もう一度下を見回してみた。

その男の姿は・・・。

「あれ？」

いなかつた。

(何だつたんだろう・・・幻影かな？)

そう思つたらエリーの動悸がおさまってきた。精神が落ち着いてきた。エリーは後ろにまた倒れこみ頭を抑えた。

(何してるんだろう・・・私。こんな時に・・・。何でこんな時に彼の幻影なんか・・・)

『エリー？ どうしたんダイ？ 本当に』

「何でも無い。・・・何でもない、から」

エリーはまた体を起き上がらせてまたマークしていた男女二人に目線を移した。

「ああっ！」

あらう事がその二人は手をつないでいる！エリーはフルフルと体を震わせた。

（何やつてんのよ！バ一真あ！）

エリーは急いで建物の間をひよいひよいと飛び越えながらその二人の後を追つていった。

## STAGE 1 (後書き)

例の二人はもちろんあいつらがモデルです。苦情覚悟で書きました！

誤字脱字があればいつでもどうぞ！

## STAGE 2

俺と友里は息を切らせながらマジカルランドの園内を走り回っていた。俺は片方の手で友里の手を引き、もう一方の手でバランスを保つために使っていた。そのバランスに使っていた腕にはめている腕時計を見た。

(後二分か)

急がなくては。俺は友里の全力スピードを無視して、尚且つ、絶対離さないように強く友里の腕を掴みながら全力疾走した。

「はあ、はあ。か、一真あ。どこ向かってるの？」

「付いてこりやあ分かるよー。」

「ええ？」

友里は顔をゆがめて必死で俺のスピードについてきた。でも、結局は息切れが激しくなってきた。俺はそのことに気づいて、立ち止まり、友里をおぶった。

「へ、へ？」

「掴まつてろよ？」

俺は友里のOKも待たずに走り出した。

「ちよ、きやあ！」

おんぶしてるには結構速いスピードだ。まあ、そうだろうな。こいつの体重は・・・・・。聞いた事が無い。教えてくれるはずがない。まあ、こいつも一応は女の子なんだから、あつて四十後半ちょっととか、五十ちょっととか。

まあ、言つなれば俺にとつては造作も無い体重と言つことだ。友里の胸の膨らみがやたらと俺の背中に当たるがそこは安定のスルーダ。得意のスルースキル発動だ！ 気にしたら負けだといふことぐらい分かる！

「ちよっと・・・一真」

「ん？何だよ」

「あ・・・下ろして？周りの人の目がちょっと・・・」

「面倒くさいからヤダ」

「えええ・・・」

友里の落胆の声が聞こえると共に、俺の後頭部に友里の吐息が直で当たってきた。

どん位走つただろう。時計を見てみると六時ちょうどまで三十秒だった。しかし、もう俺の目当ての広場は見えている。負ふられている友里は俺の目的地の方向を見た。

「もしかして一真。あの広場のこと？」

「まあな」

俺はそれだけを吐き捨て、そのまま走り続けた。

そして、付いたころには後十五秒だ。俺は友里を下ろし、もう一度友里の腕を掴んで、その広場の中心に立つた。友里排気を切らせながらも、俺の顔を見てきた。

「ね、ねえここに何があるの？」

「まあ、見てなって」

俺は腕時計に目を落として、友里の体を俺のほうへ寄せた。「へ、

へ？」と言う声が聞こえた気がしたが無視だ無視。

そして、カウントダウンした。

「10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・  
3・・・2・・・」

そして、俺は腕時計のを付けている方の腕の一本指を立てて、天にかざした。

「1！」

その瞬間ザザアツ！と言う大きな音と共に周りから噴水が噴出した。それが何十に幾重にも噴出し、俺と友里を囲った。噴水の水は太陽の緋色の光を浴びて、水の色までもが緋色に染まりあがり、輝いていた。友里視点では幻想的な光景だろうな。証拠に友里の目が光っている。その幻想的な光景を目の前に笑顔を浮かべて周りを見渡していた。

「綺麗・・・もしかして一真、これを見せるため?」

「まあな。しんどくなつてでも見る価値はあると思ひや?」

「うん!」

さすがに俺が何にもしなかつたら後々の報復が怖いからな・・・。  
来てもかわすけど・・・。

「ま、全国の王様を破つた程度で、こんなことまでしてやつてんだ。  
有難く受け取れよな!」

俺は胸を張つて尊大な言い方をした。・・・本当はず「え」と思つ  
てたけど・・・。もう逆らえない。

「何よ、えらそう!」

友里は俺の眼をじと田で見てきて、ひじで俺のわき腹をつついた。  
その後で、俺は笑いを浮かべていつの間にやら買つていた「一  
円」を懐から取り出して一つを友里に手渡した。

「乾杯しようぜ!」

「うん!」

でもなあ、気づかないよなあ。俺だつてハイになつっていたから冷  
静な判断力が欠落していた。

つまり、さつき走り回つたときに中身の「一円」に何が起つてい  
たのか・・・。

「ふはあッ!」

「ひやッ!」

中身から「一円」が一気に飛び出してきた。冷静に考えてみればす  
ぐ分かることだが・・・。考えてみればすぐ分かることはずだつ  
た。お互には「一円」でべたべたになつた「一円」の顔を見合ひ、一氣  
に笑いが顔から飛び出してきた。面白いもん・・・、そりや。

ナイトツアーマドあと四時間。それまで何しようか・・・なんて  
こともう分かつていい。行く場所は決まつていい。

「じゃあ、友里。次はミステリー・ハウスにでも入るか？」

「ミステリー・ハウス？」

「ああ。ゴールドスプラッシュコースターと同時期に作られたアトラクションなんだ。そこでは目の錯覚や平衡感覚を利用したトリックがいろいろ積み込まれているんだよ」

「へえ・・・」

たぶん、友里の気持ちは決まつたんだろうなあ・・・。

「行く！行きたい！」

「・・・・・・」

ほらやつぱりな。単純だよなあ、こいつ。催眠術にすんなり引っかかるとか言うタチだよ、こいつ。じゃあ、ミステリー・ハウスに入つたらどうなるんだろうなあ。案外そつちが楽しみだつたりする。そういえば・・・冷たい視線がさらに強くなつている気がする。。。氣が・・・持たんぞ？マジで。

『エリ、エリー！？』

エリーの体からどす黒いオーラがめらめらと揺らめいている。ジユールはモニター越しで見ていたが、そのモニター越しでもしつかり見て取れる。一真が・・・一真が・・・！

「うきぎぎぎつ！」

『エリー、落ち着いて？落ち着こうよ。ネ、ネ？』

「落ち着いていられるかつつのー！」

『落ち着かない理由がわかんないヨ。エリーはカズマの事なんと  
も思つてないんだ口？そうカツカしなくても良いんじゃないかな？  
ただ単にPPAに出された任を全うしているだけなんだ口？じゃあ、  
落ち着いて。カズマに気づかれたら任務失敗だヨ？』

「・・・・・・・・・・・・」

本日二度目の一撃必殺！怒りも重なつてさつきより大きく体が揺

れた。

「うるさい！黙れ！喋るな！それ以上言つなあ！」

『シーツ！シーツ！声が大きいヨ。氣づかれちやうヨ。』

「あッ！」

エリーは急いで両手で口を押さえた。オーラも一瞬にしてフツと消えた。建物の上からひょっこり顔を出してみると一真がキヨロキヨロと辺りを見回していた。危ない・・・。そろそろ勘付いてきたのか？しかし、結局は安堵の息を吐いて、そのまま目的地に向かって歩いていった。怖かつたあ・・・。エリーは胸を押さえて安堵の溜め息を吐いた。

『ほら、言わんこっちゃ無い・・・。危なかつたネ。でも、そろそろ勘付かれるかもヨ？』

「う、うん。気をつける・・・」

エリーの声が一気にしぼんだ。

「どうしたの？」一真

「ん？いや、なんでもない」

俺の声が危うく裏返るところだった。俺は後ろをヨダだけを見て、顔を引きつらせた。

い、いまエリーの声が聞こえたような気がする・・・。何だつたんだ？いや、そんなわけが無い。あつてたまるか。俺はエリーにもばれないようにこっそり家を出たはずだ。なのに、勘付かれるなんてこと・・・あるわけないか・・・。

さすがに、拳動不審かな？俺は咳払いを一つして、またポーカーフェイスを出した。

「あ、あれじゃないのか？ミステリー・ハウスって」

俺が指差した方向に大きく「M I S T E R Y H O U S E」と言うロゴが貼られた。大きな洋館がたのアトラクションがあった。

ずいぶんと長い行列だ。すこいなあ、始まつてまだ間もないのに、もつこれかよ・・・。待ち時間一時間つて・・・おいおい。

どうする? もつ六時半だぜ? 暇潰すとしたら・・・。

「なあ、友里」

「なに?」

「いつちゅ行つてみるか?」

「何に?」

「ゴーストタウン

「・・・・・」

友里の顔が一気に青ざめてブルルッと体が震えた。予想通りの反応ありがとう。

「い、い行くの? 本当に」

「ああ、暇だしな」

「で、でも・・・あれつて」

「あれつて?」

「あれつて・・・その・・・つまり・・・」

友里が顔を青くしながら口をつぐんだ。まあ、気持ちは分かるけど・・・俺はなんともないけど、こいつが今思つてることは恐らくとは思つてはいる。けど、こんな、もじもじ状態の友里もなかなか面白い物だ。ちょっと傍観しておひづ。

「つまり・・・その・・・」

「・・・・・」

俺は何も言わずただただ傍観。何かリアクションおひづのだろうか?

か?

「・・・・・」

「・・・・・」

微妙な沈黙感だ。何だか変な気分になる。友里は首をふんふんと振り、俺のほうに顔を向けてきた。

「か、一真」

「ん? 何だ」

「行くけど、条件有り？」

「あのわ、動きでいいんだけど……」

俺は暗闇の中で友里のほうへ向いた。そう、あのご恒例のパーティーだ。友里は俺の腕にしがみついていた。友里の歩調は明らかに俺の歩調より遅い。見て取れる。だから俺が動きづらいのだ。

でも……これが条件だし

「一瞬つぶし大だる？たかが。ど、どどつて、最後のシメはナイトツアーダな」「一真、まだ残つてゐる」

「ん？何が？」

觀覽車

一残してたけ?

二  
三

そういえば、どうか……。何も全部乗ろうとしなくとも……。  
そんな油断していると痛い田合うのは分かる。

ダガンツとでかい音が聞こえ、上からゾンビ型の幽霊セットがボトトツと落ちてきた。もちろん、俺の横の奴の反応は分かっている。

「どうせあー！」

耳が一瞬無効だと！？友里の悲鳴が直で俺の耳に刺さつた。キーンと震つて、耳鳴りが俺の耳に鳴り響いていた。いつてえ。

連れてくるんじやなかつた、じこつを・・・。たぶん、じのせんじ

や爆音」とも友里の悲鳴を延々と聞き続けなければいけないのだろう。

耳の中で「オオ」と言つ耳鳴りが聞こえる。キーンでは無く「オオ」だ。横では友里が散々叫び散らせていたから、俺の耳にトンでもないダメージが蓄積されていた。痛かった・・・。本当に。さて、何時だろうか？

「おし、もうそろそろ空いてきたかな？」

「一真？」

友里がまだ涙で赤くなつた顔で俺のほうへ振り向いてきた。

「おし、友里。さつさとミステリーハウス行こうぜ」

「う・・・うん」

友里は溜まつていた涙をぬぐつて頷いた。まだ怖いのか？俺は友里の頭をぽんぽんと叩いてポケットに手を突っ込んで歩き出した。そういえば、冷たい視線がすっかり無くなつてしまつているんだが・・・？

「や、さすがにあそこだけは・・・」

エリーは「ーストタウンの建物とは向かい側の建物の屋上で一真と友里を見張っていた。さすがに、あのお化け屋敷を一人では入れない。

『あれ？エリーってオバケ怖かつたのカイ？』

『そ・・・んなわけないでしょ！私がお化けなんて・・・』

『じゃあ、尾行すればよかつたのに、何でダイ？』

『何でつて・・・』

『何で？』

『何でつて・・・』

そしてエリーは口をつぐんで、顔が赤くした。

『やつぱり怖いんだ』

「怖くなんか・・・！」

『じゃあ、今から一人ではいれば？』

「ひ、一人で！？」

エリーの声が引きつった。何よりの証拠だ。やつぱり・・・。

『エリー、素直になりなさい。っていうか認めなさい』

「・・・・・はい』

エリーはしゅんっとじょげながら肯定した。まさかこの馬鹿口調に簡単に打ちのめされるとは・・・。

## STAGE 2 (後書き)

やっとステージ2終わったよ・・・。  
感想お願いします！

## STAGE 3

「うわあ・・・見てみて、一真！水が坂を上っていくよ？」  
「・・・・・」

はは、やつぱり。すっげえはまり込んでいる。面白いなあ。こいつのリアクション。

「ねえねえ何でか分かる？一真」

「あ、ああ・・・つまり、この床の斜面がそのセシトされている仕掛けの斜面を上回っているんだ。逆向きにな

「へえ」

「俺たちは、バランスを保つため、体を地球の水平面に対して垂直にならうとするんだ。だから、ただただこの水が上り坂を登つていくように見えるんだよ」

「へえ・・・何でもしつてるねえ、一真は」

「まあ、ちょっと小耳に挟んだ程度だけどな・・・ははは」

俺は苦笑いを浮かべながら人差し指で頬を搔いた。俺はまた一つ咳払いをして、素の顔に戻した。

「ほら、んな所で時間食つてたら、ナイトシアー間に合わねえぞ？」

「ん？」

友里はつけていた腕時計を見た。現時間、九時三十分。タイムリミットまであと三十分。

「うわっ！ホントだ！ちやつちやと全部見回つて早く行こー奇跡と光の城に！」

今度は俺が振り回されるターンだ。友里は俺の腕を引っ張つてきた。

「うわー！」

いきなりな物で俺の体が前につんのめってしまった。そういうえば、次のところつて・・・。

俺はテレビで見た情報を頭の中で回想した。

「うわわわわっ！」

友里が俺の目の前で平衡感覚を失い千鳥足のような状態になつた。俺だつて、少々危ない。マジでこけそうだ。床は全然動いていないのに、周りの情景が右回りに回つているものだから、俺の頭と、俺の体が感じている情景が合つていない。そのせいで頭の中がごちゃごちゃになつて、千鳥足となつてゐるのだ。しかしなあ・・・。

「うわわわ、か、一真あ！た、助けてえ！」

「・・・・・」

ふらふらふらふら。そんなんでよく空手女王になれたな・・・。ある意味驚きだ。俺だつてあんなに千鳥足になるわけが無い。

「友里、お前それは大袈裟にやつてるのか？それだつたらスゲエ滑稽だぞ？」

「お、大袈裟じやないからあーだから助けてえ！ひやっ！」

漫画ならずでーんと言つ効果音が鳴つてゐるだろ？。友里はバランスを保ち続けることができず、後ろからこけた。

俺は溜め息を吐いて、呆れ顔を浮かべた。世話のかかる奴だなあ・・・。

俺はバランスを保ち続けながら友里に歩み寄つた。友里はいまだに立ち上がり難い。

「イタタタ・・・」

友里はいまだに打つた部位を抑えていて苦悶の表情を浮かべていた。俺は友里の前に立ち、手を差し伸べた。ようやくバランスを保つコツを掴んだから、余裕で立てる。

「世話のかかる奴だなあ。ほら、早く立てよ」

友里は急の俺の行動にびっくりしてゐんだろうか、頬を赤くして俺の目を見つめてきた。あの、友里さん？そんなにじろじろ見なく

ても良いんじゃないかな?

しばらくしてから友里は俺が伸ばした手を掴み、俺は友里の手を掴んで引っ張った。何とか友里は立てたそうだが、やっぱりふらつと友里の体がふらついた。俺は掴み放しだったから、何とか友里が倒れる前に腕を引っ張つて、体を支えてやつた。

「か、  
一  
真  
・  
・  
・  
？」

「周りの情景にとらわれるな。この地面が水平だということを意識しろ。そうすればバランスを保てる。体の体感を優先するんだ」

卷之三

友里が頷いたと分かると俺は友里の手を放し、友里の様子をじつくりと伺つた。

息を吸い込むと、何かが鼻に刺さつたような感覚がした。なんだか、鉄のにおいがする。どつかで鏽びてるのか?これ。俺はキヨロキヨロと辺りを見回しそのにおいの根源を探した。

上からか？でも、何で？俺は壁の隙間から上を覗き込んだ。  
ま、暗いから見つかるわけがないけど・・・。

「へへわあ！——真見でみて！私も立てたよ！」

残念ながら、俺の意識は友里の喜ぶ顔より、この変な臭いの根源だった。普通じゃあかぐことがないからな。もしかしてのもしかしたら血の臭いだつたりして・・・いや、それもありえないか。どうだけ流血するんだよ。

俺は鼻で溜め息を吐きながら友里のほうへ振り向いた。

その瞬間だつた。

「」「」  
「」「」  
「」「」  
「」「」

俺も友里もいきなりの男の悲鳴に、一瞬心臓が止まるかと思った。  
まさか！まさかッ！？

俺はその声のする上のほうへ向かっていった。でも、ビビから？

「まさか・・・」

俺は走り出した。まさか・・・まさかっ！俺は駆け出しながらミステリーハウスの中を探し回った。たぶん、スタッフルームの近くか、出口近くに、セットを管理する場所があるはずだ。そこからこの場所にたどり着けば・・・。

「一真！どこいくの！」

後ろから友里の声が聞こえるが、今は構てる暇なんか無い。もしかしたらかもしれないのだから・・・。

数ある人の感覚を狂わすセットもあったが、完全に無視だ。数分もしない間に、出口にたどり着いた。

（ここからか！）

俺の目の中には影に隠れた鉄製の扉があつた。ドアノブに手を伸ばした。しかし、ガチャガチャと音が鳴るだけで、ドアが開かない。

「くそっ。手間がかかるなあ！」

俺は懐からピッキングツールを取り出し、鍵穴を覗き込んだ。ついでに腕時計を外して、LEDライトを点けてから、口に咥えて鍵穴を見えるように照らした。影で見えないしな。

俺はツールを鍵穴に差し込んで、起用に鍵穴の奥へ奥へと差し込んでいって、ぐるっとツールをまわしてみた。

すると、ガチャーンと音が聞こえた。

（よし・・・）

俺は腕時計を口から外して、ツールを引っ抜いて、鍵が開いたドアを開けた。そろそろ友里が来るころだろうが、構ってる暇は無い。

（い。

早く行かねば・・・。

そして、俺はそこにたどり着いた。そこには男のスタッフらしき

人がだけあがつて恐怖の表情を浮かべているのと、セット上で首が取れて首が無い死体が倒れ、その人の首がごろっと転がっている光景だった。

「一真、どうしたの…」

「来るな！友里！」

俺は友里が来る方向を手を伸ばして友里の動きを制しようとしました。しかし、それが仇となってしまったらしい。そんなことすれば友里の性格上、もっと気になつてこっちに駆け寄つてくるはず。それを、俺はとめることができなかつた。

そして、友里の目の中にも俺が今見ている光景が映つていた。友里は驚きのあまり、眼を大きく見開かせた。ある意味お化け屋敷よりも怖い。

「きやああああああああああああああああああああああッ！…」

「見るな！友里！」

友里が恐怖のあまり目をつぶり涙を浮かべていた。そんな顔を俺は覆い隠すように胸の中に抱いた。こいつには、まだあまりにも衝撃過ぎる画だ。俺の胸の中で、ぶるぶると友里が震えているのが分かる。

「早く警察を呼んで…」

「は、はい！」

スタッフである男はすぐに立ち上がりおそらく事務室の方へ駆け出して行つたのだろう。俺はその人の背中を目で追い、その後現場に目を向けながら、友里の背中をぽんぽんと何度も叩いた。

「むごいな…」

俺は俺にとつての常套句を呴きながら、生睡を飲み込んだ。

「で？君がたまたまここに遊びに来て、たまたまこのアトラクションに来て、そしてまた、たまたま現場に居合わせた・・・と言う

わけかい？桐ヶ谷君

（つがやまじゅんじ）

俺の目の前では宇佐美淳一警部がじと目で俺の顔を見ながら腰に手を当てていた。

細身の体に、整った目立ち鼻立ち、俺視点では「普通の体型、普通の容姿をした警部さん」だ。

俺はその嫌味風な態度をとる警部を鋭い目つきで睨みながら、後頭部をカリカリと三本指で搔いた。だからといって、警部に喧嘩をする気も無い。多分俺が負けるからな。

俺は溜め息を一つ吐いて、答えた。

「そうです。全てが全て、一〇〇%たまたまです。事件が探偵を読んでるのか、探偵が事件を読んでいるのやら……全く……」

「君が自分のことで呆れられても、僕はフォローしようがないんだけどねえ……。聞くところによると、今日は『デート』だという噂が立たなくてねえ。勿論友里君とだよ？君は友里君との『デート』先でも事件を呼び寄せるなんて……。死神体质だね」

「それは警部の勝手な妄想ですね。百歩譲ってそんな日は一生来ないと想いますので。それに、死神体质なんて止めてください。そんなことを言つてたら、次死ぬのは警部かもせんよ？」

「それはどうかなあ？僕は対人戦ではまず負ける気なんかしないし、君も『恋なんかしない』とか言つ気持ちも、五年もすればきっと変わるよ？ま、手綱はしつかり掴んどくんだね。じゃないと逃げられちゃうよ？」

「警部の奥さんみたいにですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・

すっかり黙り込んだ。俺は心の中で大きくガツッポーズをとった。よし、逆転勝利！

警部は自分の現在の心情を「まかすかのように咳払いをして、現場に目を向けた。横から見れば分かる。メチャクチャ悔しそう……。下唇の半分をかみ締めて、顔を少ししかめていた。その表情を見て薄つすらと笑う俺つて結構いじわるなんだな。

警部は胸ポケットから警察手帳を取り出し、そこに取っていたメモを読み上げた。

「被害者の名前は塩野渡海さん。<sup>しおのとおる</sup>一十九歳。マジカルランドのアトラクション、「ミステリー・ハウス」のスタッフの一人で、前は大観覧車のスタッフだつたらしい。しかし、「ゴールドスプラッシュコースター」と同時に「ミステリー・ハウス」が完成し、塩野さんは「ミステリー・ハウス」のスタッフに回されたらしい」

「そうですか。できた当時はメチャクチャ客足があつたから、結構楽しかったんじやないですか？金儲けで言つならうつほうほの状態ですね」

「何だよ・・・そのわけの分からぬ例の仕方は・・・まあ、そうだったと言つわけだつたよ。でもね、桐ヶ谷君。人間は一度幸福を覚えてしまつと、そこからは離れられないんだよ。分かるかい？意味が」

「大体は・・・。その手の類に事件は結構遭遇しますね、俺は」「そう、そこからだよ。彼を殺すような動機になりそうなことがあつたのは。かれは今後の予定で、また違うアトラクションにまわされることになつていたんだ。確か、「海賊ローブランコ」だつたみたいだつたね」

「人気なしワースト1のアトラクションですね、それ。そりゃ楽しくないな」

「だろうね。それがきっかけで彼は自暴自棄に陥つて、仕事場で乱暴に振舞つっていたんだよ。お客様にもかなり乱暴だつたらしいよ」

「そりや嫌われるわな。警部はならないよつにお願いします。乱暴は縁の切れですからね」

「君はまずその毒舌暴言症候群を治そつね。じゃないと乱暴しないつて言つことは保障できないよ」

「その時は警部の傷害罪の現行犯ですね」

「・・・・・・・・・・」

よし、またしても圧勝！所詮警部は格闘ばかりの脳筋だったといふわけだ。高校生の戯言なんて上手にことかわしていなさなくちゃな。

「うおっほん・づづき・・・

じつみても投げやりだ。なんつづつひ言い草だ。

「続きの前に一つ聞かせてください」

すびつーと手のひらを突き出して警部を制した。

「密ひそかに犯人を絞りますか？」

「まあね・・・

警部はぱぱりぱりぱりと長いページをめくつづく、そのページをド迷うけた。

## STAGE 4

エリーは「ミステリーハウス」向かいの建物の屋上から眺めていた。もちろん、そこが立ち入り禁止となつていても知っている。なにやら警察が押し入ってきて、立ち入り禁止のテープを入り口に貼り付けていた。

「何だろ・・・何があつたの? ジュール」  
エリーはPLDの無線に話しかけた。きっとジュールならすでに情報ぐらい掴んでいるはず。

『殺人事件だ!』。カズマ達が遺体を見つけて、あの警部さんと一緒に捜査している

「殺人? そう・・・なんだ」

『入りこむ?』

「うーん・・・ばれたくないし・・・けど、一真だけでそんなことをさせたくないし・・・」

『ハイ! 早々に結論を求めるね!』

「現場待機・・・一真・・・こわいし・・・怒つたらだけど・

・・・

『・・・相當来てるね。』の前のこと』

「・・・・・・・・・・・・・・

エリーは全く否定できない。本当の本当にあのときの一真の怒り用といつたら、実際目で見ないと分からないものなのだから・・・。

「一人目は一井和利さん。この「ミステリーハウス」の経営責任者。動機として挙げられるのは、一昨日にまたお密さんに乱暴な振る舞いをしている塩野さんを注意したところ、言い合いになり、そこはすぐ収束したんだけど、経営が終わった後に塩野さんに殴られ

たらしい

「大の大人がですか・・・。フフン・・・。」

「何笑つているんだい？」

「想像したら骨稽すぎで……。横つ腹が凄く痛いです。警部、

いい笑いのセンスです」

「笑い事にするのかい？探偵失格だよ」

• • • • • • • •

今は傷ついた。『あの事件』のせいでその言葉はちょっと余り口にしたくないし、聞きたくも無かつた。警部はまた警察手帳に田上警二へ。囁く声のソーフォード。『

「つづき……次の人には池井美音さん。この人もこの『ミステリーハウス』で働いているスタッフだよ。この人はちょっと『ディープかな……』

警部は俺の目の前で顎に手を当てて考え込んだ。ん？ ちょっとま

「いいラインかな？いい子供達にはあんまり聞かせたくないことかな？」  
「続けてください。言わなければ俺が意図してこの事件を迷宮入りします」

りなんて」

— ?

いつまでも続きを言わない警部に鋭い目線を送った。警部は溜め息を大きく吐いて、また警察手帳に目を落とした。

「つづき・・・。この人が犯行を行うとすれば動機と思われるの  
は、塩野さんが彼女の元彼だつたらしい。けど、三年前ぐらいに捨  
てられて、かなり気が荒んでいたらしい

「で、その復讐かと？」

「ふうん・・・」  
「多分ね・・・」

俺は警部の相槌を聞いて、口を手で隠すように顎に手を当てて考え込んだ。確かにそれはあり得る……かな？人の感情と言つ物はちょっとした事で一撃で殺意を芽生えさせてしまうからな。ま、それは池井さんに面向かって話してみなくちゃ分からぬけど……。俺はアイコンタクトで続けるようにと言つ眼線を送った。警部は分が悪いような表情を浮かべた。何か悪いことでもしたつけ？俺。それでも警部は小さく花でため息を吐いてから頷いて警察手帳に眼を落とした。これが師弟のコミュニケーションの仕方という物だ。目を合わせるだけで何を言いたいのかがすぐに分かる。

「つづき。あと二人だね。次は、音蔵乙矢さん。まあ、この人もこの「ミステリーハウス」で働いているスタッフの一人だよ。この人は塩野さんの仕事の後輩で、この人は塩野さんに先輩だからといって、彼からいくらか金を巻き上げていたらしい。まあ、ばっかりと言えば、金銭的な問題だね」

「よくあるパターンですね」

俺はそんな短い感想を言つて、息を吐いた。さすがに毒舌を混ぜた感想を言つのは疲れてきたな。しかも今日の警部は調子がよろしいようで、俺の毒舌を軽く受け流すスキルを全開にしてしまっているらしい。俺としたら面白くないのだが、さつさとこの事件を終わらせたい、という気持ちが俺の中で先走っていた。今日できたら良いんだけどなあ。

「桐ヶ谷君？」

「はい？」

警部が俺の顔を覗き込むように言つてきた。

「いつもの毒舌がなくなつたようだね。大人しくなつちやつて」

「疲れました、単純に。全部警部のせいです」

「僕のせい？ひどいよそれは。ま、いいか。じゃあ次でラスト一

人」

ほらな。軽く受け流された。っていうか気にせずスルーされた。受け流されてもスルーされても困るんだよなあ。せめて突つ込むか

落胆してくれないと面白くない。・・・ま、必死で返してきても困るだけだけど・・・。

「猪唐武雄さん。この人は高校時代のバスケ部の先輩で、結構その時は仲がよかつたらしい」

「動機が無いから除外」

「最後まで聞きなさい。この人の場合は、この人の両親の方に問題があるね。実は塩野さんは猪唐さんのご両親に金を貸しているらしい」

「なんで? ってか誰から聞いたんですか? この短時間で」

「もちろん僕の部下が猪唐さん本人から聞いたんだよ。君から通報受けてすぐに向かわせたんだ」

やつぱりこの警部は凄いよ。行動がとんでもなく早い。って言うか異常な速さだよ、超能力かよ。それについていく警部の部下もメチャクチャ凄い。

「で、」

「」の言葉で続けた。

「塩野さんはこの猪唐さんの両親にお金を貸していたらしい。しかも結構な高い金利で」

「いくら?」

「二ヶ月三割。貸してた金額は合計で八十万円だったんだって。それがもう三年前から」

「じゃあ、計算すると、約二千万ぐらいですね。って言つか、さつさと返せばいいものを、そんなに膨らむ前に」

「返しても返しても返しきれなかつたんじゃないかなあ。もう猪唐さんのご両親は定年で働いていないし、それでもタクシーの運転手とか、コンビニの店員とかで、稼いでいたけど、膨らむ一方。その実を猪唐さんが知ったのはつい最近。一緒に飲みに行つた時、塩野さんが酔いに任せて言つた言葉で知つたらしい」

「殺すとしたら、両親のためを思つてかつての仲間を・・・でもそれを仮定したらどうやって殺したのかが・・・」

「 そ う だ よ ねえ。 何 か 容 疑 者 全 員 パツ と 来 な い ん だ よ ねえ。 殺 す  
と し た ら の 場 合 の 動 機 が 暫 昧 な ん だ も ん 」

俺も同感だ。確かに、人を殺しそうな動機がいっぱい浮かんだが、何か一步足りない。本当にそんなことで人を殺してしまったのだろうかと言う感じだ。まだ何か足りない。何かが・・・。

警部一郎のアトラクションの仕掛けの中から「んな物が」

警部の部下のおじさん鑑識さんが袋の中に入れたピアノ線らしき物を見せてきた。そのピアノ線らしき糸には真っ赤な血液が付着していた。たぶん塩野さんだろう。

- . . . ?

俺はそれを覗き込むように目を細めた。なんだ？これ。べつたりと付いた塩野さんの血液のほかに薄つすらと点々と十箇所ぐらいに血痕が小さく残っていた。俺は首をかしげて体勢を直して、顎に手を当てて考え込んだ。

「どうしたんだい？ 桐ヶ谷君。何か変なところもあるかい？」

俺は表情を元に戻して

俺は表情を元に戻して、  
彼の言葉に顔を合わせた。  
結構無理やり、気味

「どうしたんだー？」

「もうしたんだい？顔を汚すのいやで」「何でもありませんよ。あの、警部？」

「既勝既敗の二二二、いか?

「ん？ああ、いい。でもうん

警部が道をどけるようて脇に避けてくれた。って、んな事しなくても普通に通れるけどな。このセット裏は薄暗いが結構広いからぶつかることはほとんど無いだろう。

俺は警部に小さく頭を下げる。堂々と現場の部屋に入った。少し薄暗い現場の部屋にはもうあの首無しの死体は警察に回収されているらしく、その死体が転がっていた箇所にビニールテープでその死体

の形を示していた。

その死体が転がっていた場所の近くにはこの仕掛けがしつかり動いているのかを確認するためのものであろう、肩幅よりほんの少し狭いぐらいの穴開きの覗き窓があつた。その覗き窓の右側に比較的多くの血痕がビッシャリとへばりつくように残っていた。

俺の目が入り口にドアの上ぶちに止まった。

(なんだ?あれ)

セロテープ・・・か?それが肩幅より少し大きいぐらいの間隔で二枚貼り付けられていた。俺は少し考えて、俺の頭の中に何かのイメージが浮かんだ。

(もしかして・・・)

俺はすぐに覗き窓の方へ駆け寄り、縁の辺りを調べた。もちろん、視界が悪いから時計型LEDライトを点けてだ。そして、俺は見つけた。

俺は思わず笑みを浮かべざるを得なかつた。

(なるほどな。こうやって殺したわけか)

でも、どうやってこの仕掛けを作ったのかがわからない。殺し方は分かつたがそんなことができるのか?出来るとしたら俺や警部みたいに運動神経が良くて、体の間接が柔らかい必要がある。

俺は顎に手を当てながら考え込んだ。

(やっぱ、直接顔をあわせて聞いてみるしかないな)

俺は小さく溜め息を吐いて後ろへ振り向いた。そこには容疑者だらうさつきの塩野さんと同じユニフォームを来た三人のスタッフがその現場を呆然と見詰めていた。そして茶色の短いボブカットの髪型をした女の人が膝を付いて泣き崩れた。

俺はそんな光景を横目でやりながら警部の方へ歩み寄った。

「警部、の人たちは?まさか、容疑者のうちの三人ですか?」

俺は警部の耳にささやくように聞いた。警部は少し目を見開かせてその後俺から視線をそらせてその三人に向かた。

「ああ、そうだよ。彼らが猪唐さんを除く、容疑者の人たちだよ

俺はその言葉を聞いて小さく何度も頷いた。俺は時計に眼をやつた。今日の無いとツアーはあきらめようかなあ。事件が起きたとして中止食らつてるだろうからなあ。後で友里になんて言い訳をしようかなあ・・・ん? 友里?

そういうえばあいつはどうしてんだ? 現場見て追い払つたけどあいつ今いったいどこにいるんだ?

「どうしたんだい? 桐ヶ谷君

「いや・・・友里今どうしてるんだろうかなあつて・・・さすがにこんなに置いてけぼりにしておくわけにもいかないですしね」俺は苦笑いを浮かべて警部に顔を向けた。そして、その苦笑いをといて目を開けてすぐに入つた情景は警部がすつごい嫌味でじと目をしているという光景だつた。あ、やばい俺の氣づかぬうちに警部のトンでも嫌味スイッチをONにしてしまつたらしい。

「やつぱり桐ヶ谷君でも女の子を思つ心があるんだなあつてね。桐ヶ谷君進化の瞬間だ」

「・・・・・・・・・・・・

さつき俺も友里に同じことを言つたよつの氣がする・・・まあ、さて置き、やつぱり俺は氣づかぬ内にとんでもない事をしでかしてしまつたらしい。さてどう打とうか。いつもは後手後手に回つて気づいたらとんでもないダメージを追つてしまつているというパターンになつてしまつてゐるのだから、今回は先手を打とう。

「じゃあ警部、俺はちょっと友里の様子を見てきますんで」

と、俺はその現場から走り去つた。後ろから「ちょっと、桐ヶ谷君!」と言つ警部の声が聞こえるがそこは安定のスルーだ。気にしてられない。先手を打つたよ、確かに。「エスケープ」と言つ形でな。

「?」

そして、俺の目が一瞬止まつた。うずくまつて泣いている人の手の平が一瞬見えた。あれは・・・

「・・・・・・・・

俺はそのさつき見た情景を頭の片隅に置いて、そのままその薄暗い廊下を走り去つていった。

## STAGE 5

友里はミステリーハウスの外で警察の人と一緒にいた。さっきの首無しの死体の映像がなかなか頭から離れてくれない。忘れないのに全然忘れられない。真っ赤な鮮血がベツシャリと部屋の壁に飛び散っている映像が友里の背中に冷たい感覚を走らせる。

(一真・・・一真・・・!)

何で一真はあんなにも平気なのだろうか？あんなバラバラ死体を見て友里の顔を覆い隠せるだけの余裕があった。何でか分からぬでも、今は一真の胸の中に飛び込みたい気分だ。あの時に見たバラバラ死体のせいで、トンでもないトラウマになってしまった。あの時も、一真が友里の頭をすぐに包み込んでくれた。あの時はほんの少しだけ恐怖がぬぐえた。

「友里！」

向こうで友里を呼ぶ声が聞こえた。小さな時から聞きなれた声で。

友里は女の刑事さんに背中とかを時々ポンポンと叩かれながら、慰められていた。ん？表現が変だつたかな？なんだか疲れ切つて、文章を頭の中で作つて解説するのはやり辛いな・・・。思つて以上に全力疾走だったからな。俺は友里のほうへ向いて、「友里！」と大きな声であいつの名前を呼んだ。そして、友里は俺の声に反応して、こっちに振り向いてきた。

「ん？」

なんだか友里の体がわなわなと震えてるよつな・・・。何でだ？

「一真あ！」

「ツ！」

突然の大きな声にびっくりするわ！てか何でだ？何があつたんだ

! ?

「一真あ！」

「ハイツ、ストップ！」

友里が何やら俺の胸に飛び込みそうになつてきた。それを友里の頭をグイッと押して上手いことガードできた。友里はあわやバランスを崩しかけて倒れそうになつた。ま、そこは何とか持ちこたえてくれたけど。しかも、もしここで倒れこまれてしまつたらトンでもないきわどいアングルになつてしまふことは間違いなしだ。

Γ Μ Σ

何でそんなに泣きやがな顔になー

「まだ不<sup>ハ</sup>ケがみえたる! とが<sup>ミ</sup>」

「何だか…?」

- • • • • • • • • • • • •

同上。但此卷之文，皆以漢文寫成。

何だか、……。」のとんでもなく重苦しくて、氣まずい沈黙の時間は……。何だかやうづらこ霧囲氣だ。どうするか。どうやつてこの空氣を紛らわす?

「ああ……と早く捜査は済んないにないから……」  
話はその後でな

一真・・・・

13

私も一真と一緒にしる

[ 11 ]

何をおっしゃってるんだ?この少女は。待て待て。つて事は、こいつは単純に俺と一緒に居たいだけなのか?どこまで俺の引っ付きたがりなんだよ。いいつけでYESと書いて置かなければ、「もう知らない・・・」とか言ってプレイッと想像を尽かされるだけだ。そして、後が怖い・・・。今はなんとしてもそんな事態は避けねばならない。

「わあつたよ。好きにしろよ」

俺は友里から視線を外しながら苦虫を潰したような表情を浮かべながら言った。しょうがないからこうするしかない。俺は溜め息を吐きながらチラッと友里の方へ向いた。ほんの少しだけ笑顔が戻つて機嫌も直つてくれたみたいだ。危ない危ない。今度はスイッチを押さなくてすんだようだな。俺も友里の顔を見て口元で笑つた。ま、放つといても付いて来るだらうなと思いながら俺は友里に背を向けた。

「おつと・・・」

振り向いた先に俺の身長を一十センチぐらい超える男が立つていた。下から上まで黒ずくめでホワイトシルバーのロングヘアーハーが特徴的な男だった。

(GINに似てるな)

本当にあんな奴がこんなところで見れるもんなんだな。それにはんだ・・・こいつの目。冷たすぎる。全ての闇を見てきたとか言う目だ。

(・・・・・?)

何だろ?。さつきから右目が微妙にズキズキする。気づいたらドクドクと眼球が鼓動しているようなあの感じだ。

「じけ・・・」

俺の目の前にいる男は俺を左の方へ押し出して自分の通り道を作つてそのまま歩き去つていった。俺は押し出されてあわや倒れるところだつた。ま、俺のバランス感覚だって舐められたものじゃないから倒れることは無い。

「?」

バランス・・・感覚。そういうえば、あの仕掛けをするにはそれ相応のバランス感覚が必要るよな・・・。

「ツ!」

そうだ。バランス感覚がいそつなことを考える。あの仕掛けが出来て、運動神経があつて、バランス感覚があつて、あの全体重を支

えられるだけの腕の力がある人。そういうえばあの時……。

「ツ！」

俺の頭の中で電撃が走るような感覚が出た。

「そうか……」

もし俺が予測したとおりの状態であったのなら……。俺は友里をほっぽり出すように走り出した。もちろん、現場に向かつてだ。それ以外に行く場所なんかどこにある？

「ちよつと、一真！どこ行くの！」

「現場に決まってるだろ！」

「現場あ！？ちよつと、待ってよおー！」

後ろから友里の大きな声で俺の制止を促すような声が聞こえたが、今は無視だ。この俺の推測を完全に立証出来得る証拠が消えちまうまでに早く行かなればいけない。タイムリミットも分からぬ。だったら一刻も早く行かなればいけない。

『おーい、エリー起きろお。ボクが気づかぬ間に何寝てるんだイ？』  
「……」

とわ言われても暇な者だからしようがない。確かにあの現場に直接乗り込むのが一番得策なのだろうが、そうすれば一真の激怒必至だ。だからミステリー・ハウスの向かい側の建物の屋上で息をひつそりと潜めて一真がいつ出てくるのかを待っていたのだが、こんなにも何もせず、しかも標的も現れないんじゃ暇でしそうがない。眠くなるのは……頷ける。ジユールだつてそれぐらいは重々承知だ。しかし、職務上、ここは起こしてやらねばならない。

『おい、エリー。起きなさい！』  
「う・・・ん？」

『仕事中！』

「・・・・・

ヒリーは寝ぼけ顔の田をじすりながら半開きの田をぱみかへつせせて辺りの情景を見回して、小さく溜め息をついた。

『おはよー、ヒリー。仕事中に居眠りなんてするなんてネ』

「う・・・

ヒリーの頬が見る見るうちに紅潮していく。焦つてると同時にぐらにジユールでも一発で分かる。

「ち、違う！これは違う！これは・・・

『これは？』

「・・・・・

じう言葉に迷っているヒリーを見るのはなんだか面白い。じいは静かに静観しておこうとジユールは思った。

「これは・・・

『・・・・・』

静観静観。ジユールはそう自分で言い聞かせながら。ヒリーの高潮している顔を拝んでいた。向こつからはじちらの表情は分からぬ。それを言いつつに、笑いの表情を浮かべていた。

「これは・・・、えーっと。そうだ」

『ウン』

「ちよつと考え方してただけ！深い深いお前なんかじゃ考え方られないぐらいふつく雑なこと」

『ナルホド。さすが優等生は違うね。ボクみたいな情報処理能力と複雑回路電子機器の扱いと情報収集とそれから・・・』

「ストップ！」

ストップが掛かった。さすがに行き過ぎた。

『たつた三つぐらいのことしか出来ないボクなんかじゃ考えられないことなんだネ』

「ジユール、あんちよつと私より頭の回転が速いからって、私をおちょくってるでしょー！馬鹿にしてるでしょー！

『まさか。この会話の中のどこにキミを馬鹿にしてるよいつな言動

なんかしてるんだい？それに、ボクはキリに「バカ」なんていつた覚えなんか無いよ？』

「それ！その態度！その態度が私をバカにしてるって言つて言つて！」

『今の君の怒鳴り声がとても面白いヨ。カズマ風に言つと「滑稽だ」かな？まさに今のエリーはその通りだね』

「もう！馬鹿バカばか！」

『さて、話戻して、キミは何を考えてたんだい？頭の悪いこの外道たるボクに教えてくれないかな？』

「う・・・それは・・・」

またエリーの顔が火照るように赤くなつた。

『それは？』

静観モード、スイッチオン！さてここからが面白い場面だ。しかし、この後まさかの予想外の展開が起きてしまつた。

「うるさい！黙れ！喋るなあ！！」

『ん？エリ・・』

ブツッソ、と一方的にエリーが通信を切つた。あんなにエリーを追及していくるジユールなんか初めて見た。（実際には顔が見えないので見てないことになるが・・・）

でも、考え方をしていたのは確かだ。なかなか一真が出てこない物だから、ちょっと目をつぶつて考え方をしていた。

そういえば、何を考えてたんだつけ？一度熟睡してしまうとそれ以前に何を考えていたのかが全く思い出せない。でも、ジユールの声が聞こえる前に変な絵を見た。嫌な絵だった。エリーはその絵を思い出すと、首を横に振つてそのイメージを振り払つた。

（ま、あんなことが起こる訳無いか・・・）

そうエリーは割り切つたような表情を浮かべて空を見上げた。

起こるわけが無い絵、一真が体中を銃弾によつて貫かれてしまい自分達の前から消え去つてしまつなんて変な絵を頭に思い浮かべな

がら・・・。

「ちよつとい、一真。何してるの？」

俺と友里は今アトラクションの中の通路外の溝の中にいた。そこでもこの仕掛けの壁を回転させるためのメインの歯車の力をそらして大きくするためのもう一つの歯車があった。

そう、ここにあの刑事さんが見せてくれたピアノ線があった場所だ。

もし、俺の推論が全て正しければここに痕跡が残っているはず。それが気づいている刑事さんがしっかりと印をつけてくれているはず。

俺は地面をライトで照らしてその痕跡を探した。どこだ、ビニールある。俺はそう思いながら上も照らした。そして、見つけた。

俺はいつもあの癖、左手で右目を覆い隠し、人差し指の第一間接で眼鏡のブリッジを押さえた。さて、どう犯人さんを切り崩していこうか。俺は薄っすらと口元で笑いを浮かべた。

(やあ、狩らせてもらおうか。この謎の悪意を・・・)

## STAGE 6

「何なんですか。まだ帰らせてくれないんですか? もう、捜査は終わったと聞きましたよ?」

俺は必死で捜査の容疑者から外れようとすると容疑者衆を見つめている。隣では友里が俺の懐に隠れて、容疑者衆を見つめていた。

必死で言つてくる容疑者衆三人に対し、警部がなだめるように言つた。

「ええ、全ての捜査は終わりました。これから、その真相をお話しするんだそうです」

「そうです!」

三人の中で、ガタイの大きい男、一井和利さんが前に出て、顔をゆがませて警部に迫つた。そりやそうだな。あんな言い方じやあ、人任せっぽく聞こえるもんな。

「そう、その真相にたどり着いた、この少年の推理をどうか聞いてやつてください。高校生探偵の、桐ヶ谷一真君のね」

「・・・・・・・・・・・・

その警部の言葉とともに、容疑者衆三人の目が変わつた。いや、変わつてしまつたというべきか。何言つてるんだよ、この警部はどうとう警部までもが俺のことを高校生探偵なんて、警察が探偵なんかに頼るなんて、本当はだらしない話なんだけどなあ。まあ、犯人が分かつたには変わりないけどな。

俺は後頭部をカリカリと搔きながら、警部たちの前に出た。

「君があの有名な高校生探偵、桐ヶ谷一真」

「うそ・・・・

一人の長身のひょろ体系の人、音蔵乙矢さんと、さつき膝をついて泣いていた女人、池井美音が絶句した。もうこんな所まで名が知れ渡つていたのか・・・。落胆したい気分は山々だが、早く真実を解き明かしてやらねばならない。

俺は咳払いを一つした。

「さて、今回の事件は誰もいない部屋で、人が首を吹っ飛ばして殺人を犯したということが、第一発見者の人によって、立証されました」

「待てよ、つてことは、今回の事件は密室殺人、と言つわけか！」

？

俺の言葉に噛み付いてきたのは一井さんだ。俺は人差し指を立てて、場を制すような仕草をした。

「そ、各アトラクションの掃除係であつた第一発見者の人は自分で鍵を開けたといつていました。そして、マスターキーを持つているのは、アトラクションの清掃していく掃除係の人たちと、この「マジカルランド」のアトラクション開発責任者、アトラクション整備士だけ。この「マジカルランド」のオーナーでも持つていません。犯行を犯せるのは、ここアトラクションの人と、さつきマスターキーを持っていると言つた人たちです。しかし、この時点で、マスターキーをもつている人たちは除外してもいいでしょ？」

「どういうことだよ！」

本当に男氣あふれる人だなあ。俺の言つたことにいちいち噛み付いてきやがるなあ、一井さんは。でも、ここで俺が毒舌暴言で対抗してしまうと推理ショーが泥沼化してしまう。それは避けよう。

「まず第一、マスターキーを持つているのは先に言つた人たちだけですが、管理しているのは他でもない、事務所の人です」

「じゃあ、第一発見者はどうするんですか？それに、もう一人の容疑者的人はどうなるんですか？」

これに噛み付いてきたのは池井さんだ。

「もう一人の容疑者、猪唐武雄さんはアリバイがあります。塩野さんが殺されたのは開園時間である午前十時、実は午前十時ごろ猪唐さんは同僚と出張場から帰る途中で、その時間帯は新幹線の席に座つて寝込んでいる時間帯でした。帰つて来たのは殺人が発覚する一時間前、警部の部下たちが猪唐さんのお宅に捜査を入れに行つた

ときには、もう疲れてふらふら、とても犯人にするには無理があります。という訳で、猪唐さんは容疑者から除外。そして、第一発見者である掃除係の人も除外可能です

「何で？」

「これで全員だ。最後は音蔵さんが俺の一言に噛み付いてきた。

「掃除係である第一発見者は、しっかりと掃除用具一式を持っていました。もし、殺人を犯しているのなら、まず一番最初に疑われている第一発見者でいる理由がありません。そもそも、営業時間考えてください。警部の部下の人から聞いたんですが、アトラクションの掃除をするのは、一日一回。まずは殺人が発覚した時間である、午後九時半ごろと、閉園前の時間である午前の二時ごろです。そんな時間で、ふらふらと清掃員の姿で誰かが殺人現場から現れたら、誰かが気づく、と言うより、悲鳴聞こえてすぐに駆け込んだ俺が気づきますよ。あの扉から出て、いちいち鍵をかけるなんてリスクなんてことは普通しないでしょう。俺があの扉をピッキングして入っているのですからね。その辺りは確証付きです。と言うことで、第一発見者の人も除外。残るはあなた達ですよ。一井さん……。池井さん……。音蔵さん……。」

俺は三人の容疑者を順に見た。

「さて、まずこの犯行に行われたトリックをお教えしましょう」

俺はそのそのトリックに使つたと思われる、平衡感覚を失わせる仕掛けに近づいた。

「方法は簡単、この仕掛けを回す支柱に、犯行に使われたと思われるピアノ線を引っ掛け、この覗き窓の傍に塩野さんをおびき寄せるだけですよ。ほら簡単」

「でも、密室だったんだろ？ 塩野はなんで鍵を閉める必要がある？」

「これは一井さんだ。

「たぶん、犯人がそこに塩野さんが誰にも見られたく無い物を放り込んだんでしょう。証拠に、棒か何かでいろいろな箇所を突付い

た跡がありました。ま、その跡の中には犯人がその棒を使った跡も残っているでしょうね

そして、俺は念を押すように言った。

「塩野さんの首を吹っ飛ばしたと思われる、ピアノ線を、トリックに使つたと思われるこの仕掛けの回転柱に下から巻き、それをこちら側に引き出すための、棒の跡がね」

「・・・・・」

容疑者の三人は黙つて俺のほうを見ていた。その視線を無視するよつに俺はその殺人現場から出て行つた。

「桐ヶ谷君、どこへ？」

後ろから警部の声が聞こえた。俺は立ち止まらず腕を上げた。それは単純にその部屋にいる人たちを制すると言つだけのメッセージ、と言つことぐらい分かつてもらえるだろう。最悪でも警部なら。

「俺はこのトリックを作るだけですよ。今、みんなの前でこのトリックを作つて差し上げますよ。そうしたら、自然と犯人も分かります。何たつて、このトリックを作れるのは、犯人だけですから」「俺はその部屋にいる人たちに見せないように口元で笑みを浮かべた。

「う・・・・」

エリーはまたあらうじとか見張り台として確保した建物の上でうつ伏せて寝ていた。

『エリー・・・エリー』

エリーのPLDからジユールのエリーを呼ぶ声が聞こえる。しかし、今度は全然起きてくれない。これは起きる気配がない。こうなつたら起きるまで放つておこう。と言つのがジユールが出した結論だつた。

しかし、本当はここでおこしたほうが良かった。エリーは今、さ

つき見た夢の続きをていた。

あの、一真が、銃弾によつて打ち抜かれるあの夢を。

頭から血を流した一真が銃弾によつて打ち抜かれるたびに短い悲鳴をを出す。声が聞こえると次々に乾いた銃声が響く。

ぐ・・・がツ！

乾いた銃弾が、一真の足を、腕を、腹を貫き、血潮が飛び交う。血潮が飛び交い、それを眺める銃の持ち主が口元でゆがんだ笑みを浮かべる。どこまでも冷たい、笑みを浮かべる。

そして、仰向きに倒れた一真の目は、明確に光を捉えてはいなかつた。ただただ、自分に銃口を向けている男を見ているだけだつた。そして、その銃口は明らかに一真の心臓を狙つていた。

じゃあな・・・名探偵

その瞬間、乾いた銃声が響いた。

「ツ！」

そこで、エリーの目が覚めた。呼吸が整わない。さつき、自分が一真になつた気分だつた。自分の銃弾が次々と撃ち抜かれていつた。そして、何の抵抗できない感じ。相手の威圧によつて自分の体が凍りつく感じ。忘れはしない。あの時と同じよつた感覚は、忘れることが出来ない。

エリーはいつの間にやら白い清純なワンピースの裾から出た自分の腕をさすつっていた。熱帯夜の外気を超えるような寒気が、エリーの体の内から出てきて、包み込んでしまつた。暑い夏のはずなのに体中から鳥肌が立つなんて、変な感じだ。

「・・・・・」

エリーは腕をぶらん、と下げるとき考え込むように頭をたらせた。エリーの長い漆黒色の張りのある髪の毛が背中にもたれかかった。自分はあの夢で、一真になっていた。まるで、これから先に一真に起きたことを告げるかのように。その時、確かに一真を撃ち抜いていった人物は・・・。

「いやッ」

エリーは首を横に大きく振り、頭の中の映像を振り払った。思い出したくない。思い出してしまつと、すぐにそれに呼応するかのように『彼』が現れてしまいそうで怖い。自分の周りの人たちが、『彼』によって全員消されてしまうのが怖い。

S H E L Y • • •

(ツー・)

S H E L Y

(ツー・)

何故か、エリーの頭の中で、『彼』の声がこだまする。

そうだ、夢のときと同じ事を、エリーは経験した。あれがきづかげで、自分の人生は大きく傾いた。

S H E L Y • • • !

「いやッ」

エリーは両腕を掛けて目をぎゅっとつぶり、首を横に振った。想像したくも無い。幻聴も聞きたくも無い。あの声を聞くだけで、自分が全てを食い尽くされてしまいそうだった。そう、友里も、ジユールも、P P A の皆も。そして、一真でさえ、食い尽くされてしまいそうだった。しかし、今は『彼』の姿はどこにも無い。今からそんなことがおきるはずが無い。そう思つて、自分をちょっと誤魔化してみると、少し気が楽になった。

エリーは堅い瞼を開き、こげ茶色の瞳でただただ地面を見つめた。そうだ、あるわけが無い。よりもよつて、一真があの組織と関わるなんて事・・・。そう思いながらエリーは暗くなつた空を見上

げた。このくらい空をより強く照らすのは、向いの方にある、西洋式の城型のアトラクションのナイトツアーバイオ由りて大きく、強く照らされた光だけだった。

「まだかい？桐ヶ谷君」

警部が覗き窓から俺がいる場所を見下していった。俺がトリックを作り上げてからまだ三分も経っていないって言つて、気が早いんだから・・・。

俺はそう思いつつも作業の手を止めず、着々とピアノ線を回転柱に巻きつけていった。そのあと、すぐ傍の壁に付いている、小型の懐中電灯をつるす為のフックに、巻きつけたピアノ線を引っ掛けた。さて、ここは終わりだ。後は・・・。

俺は上の覗き窓を見上げた。

「フツ・・・・」

うつかりと鼻で小むく、息が抜けるような笑い声を出した。簡単なトリックでよかつた。やつぱ、「コナン」読んどいてよかつたよ。あれは物理トリックが主だから、どうじう仕組みで、どう殺人を犯すのかが理解が出来る。「これも、「コナン」を読んだ」とによつて得た、『耐性』と言う物だ。

「警部！」

「ん？ なんだい？」

上から覗き込む警部は俺を見下して声を上げた。その声がこの仕掛けの中でこだまする様に響く。

「そこにゴミがこの仕掛けの中にあつたときに、取り除く為の棒があるはずです！ まずそれを手にとつて下せ！」

「ん？」

警部の顔が覗き窓から消えた。たぶん俺が言つたものを探してみてるのだろう。その後約十五秒ぐらい後に警部の顔と共に何かをして

引っ掛けの棒が現れた。

「これかい？」

たぶん、警部が取り出した棒を指しているのだろう。勿論、合っている。

「そうです。それで、このフックに引っ掛けたピアノ線を引っ張り出して、その部屋に出ておいてください」

「ん？ 分かったよ」

と警部は言うなり手をいっぽうに引っ張り出して俺が引っ掛けたピアノ線に引っ掛けようとしていた。

「あれ？」

上から警部の疑念の発言が聞こえた。そう、俺の目の前には確かに棒が降りてきた。しかし、それだけだ。俺の目の前で棒が空を切つて横に縦に振り子のように揺れているだけだった。

「あれ？ 届かない？」

警部が無理して腕を伸ばした。いやいや、そんな事したら警部の体が・・・。

「つづー！」

警部が顔をしかめて顔が引っ込んだ。ほら言わんこいつちや無い。無理するからだ。俺は小さく溜め息を吐いて上を見上げた。まあ、こうなることは予想していたけど・・・。

「桐ヶ谷西・・・僕には無理だよ。ちょっと、腕の筋肉が攣つちやつたよ」

「そうですか、すいません。実は警部

「ん？」

「実はそれ、確信犯なんです」

「・・・・・？」

警部の目が点になつた。いきなりの発言にどう対応すればいいのか分からなくなっているようだった。

「へ？」

やつと口を開いた。俺はあくまでも無表情で上から俺を覗き見下

げる警部の顔を見ていた。

「じゃあ、僕がこんなことになるって事は知つてたつて事?」

「可能性は高いと思つていました。すいません」

せりふと、とんでもないことを言つた俺。警部は大きく溜め息を開きながら俺をじと目で見下ろしていた。

「じゃあ俺がそこに行くまで待つていてください」

俺はそういう残し、トリックの土台となつている場所を後にして、現場に向かつていった。

「大丈夫ですか？ 宇佐美警部」

友里が宇佐美に近寄り、一真のせいで腕を巻らせ、苦悶の表情を浮かべている宇佐美の顔を覗き込んだ。友里の気配を感じるなり、苦悶の表情を消し、笑いを浮かべた。でもやっぱり、痛そう。目がピクピクしている。

「大丈夫だよ。桐ヶ谷君の蹴りを貰つよりかはマシだから」「本当にすいません」

もう、頭を下げたい。と言つよりもつ下げてしまつている。宇佐美はなだめるような表情を浮かべ、友里の頭を見下していた。

「いいよ、友里君。君が悪いんじゃない。桐ヶ谷君の犯行意思を読み取れなかつた僕が悪いんだよ。後で、報復しとくから」「・・・・・」

笑いを浮かべながらさりと怖いことを言つた宇佐美。ある意味怖い。友里も一真に対して笑みを浮かべながら脅迫することはたびたびあるが、なんだか上手いこと言い負かされ、はぐらかされる。しかし、今の宇佐美を見たら、さすがの一真も震え上がるだらう。見せてみて一真が本気で震え上がる表情も見てみたいとも思つていた。

「警部、怖いですよ。さらつとそんな事言わないでください。や

り返しますよ」「

出入り口のほうからあの毒舌暴言上手な探偵さんの声が聞こえた。どう聞いてもあまり怖がっていないうつだった。

俺は警部がとんでもなく怖いことを言っていたのを聞いていたが、さつきそんな事すれば傷害罪だと黙つておいたので、あんまり怖くも無かつた。やっぱり先に打つ者は布石だよな。

俺は小さく鼻でため息を吐いた警部を横目に、さつき警部が覗いていた覗き窓に近づいていった。

「さて・・・」

俺はもはや常套句のようだ出だしで、推理の続きを話した。

「さつき警部にもやつて貰おうとしたように、犯人はさつき警部が使つていた・・・」

と、ここで言葉を切り、警部が痛みを感じて放り投げてしまったと思われる棒を拾い上げ、くるりと一回転させた。

「この、バール状の長い棒を使い、俺がさつき引つ掛けってきたフックに引っ掛けたあるピアノ線をここに引き上げ、持つてきたセロハンテープを、あの入り口の上縁に貼り付けて、メールか電話でここに塩野さんを呼び寄せる。その後、塩野さんにセット裏に塩野さんが見られたくないものがあつたという。もちろん、塩野さんは激昂したでしょうね。なんせ、セット裏なら、さつき俺が仕掛けに行つた場所まで行けば良いはずですからね。でも、早く取りたい塩野さんは、何とかしてここからその物を取りたい。そこで、田に付いたのは・・・」

俺はその後警部が放り投げた、長いバール状の棒に目を向けた。

みんなの視線も、その棒に目を向けた。

その瞬間、みんなの頭の中には、思い浮かんだはずだ。どうやって、ここで塩野さんを密室に追いやり、首なしの死体を作りあげら

れてしまったのか・・・。

俺は推理を続けて行つた。

「塩野さんは下に降りるのが勿体無くと感じ、すぐそこについたバール状の棒を取り、この覗き窓から下を覗き込み、手に持つているバール状の棒で、その塩野さんが見られたくないものを引き上げようとした。もちろん、それも犯人の狙い通り。あらかじめ用意しておいたんですよ」

「待つてくれ！桐ヶ谷君」

ここで俺の推理を止めたのは警部だ。

「僕は届かなかつたけど、もしかしたら塩野さんは届いたのかもしない！ そうなれば彼はどうやって？」

「届きませんよ・・・」

俺は静かにそういうと、警部は顔をゆがめて、首をかしげた。

「あの距離は、ギリギリ届かないんですよ。あそこを覗き込んでもバランス感覚で立ち続けて、それで尚且つ関節が柔らかい人って言うのはどういう類だと思います？」

「そりやあ、僕みたいに運動神経がいいのなら・・・体操選手・・・かな？ そうなると、絞られるけど、この中には・・・」

警部は三人に容疑者を一目した後、俺の方へ向いた。

「いますよ？ しっかりと。この中にね」

そうだ。あの時に見たものが幻ではなかつたら。犯人は・・・。

「そう、犯人は・・・あんただよ」

そして、俺は犯人を人差し指で示した。

「池井美音さん」

## STAGE 7

暗闇の空間の中でタバコの煙が上空へ舞っていた。そのタバコを吸っている男は壁にもたれかかり、腕を組んで自分の被っている帽子で目を隠していた。上から下まで黒ずくめの男で、ホワイトシャツのロングヘアーは、その男の背中によつて壁と押しつぶされるように広がっていた。

あの時のある女の顔・・・。いつもぼうとしていると何故かあの顔が思い浮かんでくる。あの顔・・・。この組織を裏切り、あろうことか「A」のメンバーと一緒に高飛びをしようとしていたところをこの男はそれを見つけた。まずは「A」の脳天を打ち抜いた。身構えていると言う事を完全に無視して、「A」の頭に風穴を開け、飛び散る脳漿を見て、口元をゆがめて静かに笑った。あの時、あの女の、決意と恐怖に塗りつぶされたあの表情が消えない。睨んではいるが、明らかに目の色は恐怖の色一色だった、あの表情を、何故か壊すことが出来なかつた。「A」が残した、最後の「切り札」によつて逃げられた。

「フン・・・・・・」

そんな考えに老け込んでいる自分を想像してしまつと滑稽に思える。あらう事が、任務中にはかの事を考えてしまつてはいる自分の姿を想像してしまつと、ついつい笑ってしまう。

今は任務中だ。任務中にほかの事を考えるなんて御法度だ。樂しみは後にとつて置いたらいい。

「ジーンのアーキ」

横のほうから自分の事を呼ぶ野太い男の声が聞こえた。「ゴシゴシ体系の上から下まで真っ黒のサングラスが印象的な男だつた。

「どうだ、WAR RAY。あの男は来ていたか」

「いえ、どうやらまだみてえです。もしかしたらあの男、取引すつぽかしてトンズラしたんじやあ

「いや」

ZINはすぐにWARRAYのマイナス思想を否定した。

「お前も分かっているとおり、あの男は自分の立場が危うくなるとあらゆる手段を用い、自らの保身に走る。今回の案件は奴が一役買ったおかげで、安泰にこの件は行く事になった。いかなかつた場合の加えられる制裁ぐらい、あの男ぐらい知っているはずだ」

「VORGAVEの奴ですか。あいつが絡んでいたとなれば、下手に動けないですね、あの男も」

「ああ、だつたらオレ達は気長に待つてやれ。奴への最後の餞別だ」

そう言つてZINは暗くなつた上空を見上げた。表情は彼が被つている帽子でうかがうことが出来ない。最悪でも、目は見えない。

「そういうやあ・・・」

ZINの横で、彼の上を見上げる顔を見上げながら、WARRAYが口を開いた。

「あの女が組織を裏切りつて逃げ出した日から、六年ですね、アニキ」

「ああ、そうだな」

さつきからずっとと考え込んで耽つていた内容だ。わざわざ何を考えていると口にせずとも、自然と読み取る。パートナーを組む上で心強いキャパシティだ。

「まさか、アニキからこんな長い間逃げおおせるなんて、思つて無かつたですね。一つの口潰しゃあ、恐れてのこの表に現れると思いきや、他のところに移つていやがつた。まさか、アニキが今考え込んでいるのは、あの女ですかい？」

「ああ、あの時あの女の顔が離れないんでなあ。殺した奴の顔は忘れられるが、裏切つた奴の顔はどうにも忘れられない。ま、時が来れば向こうから赴いてくるだろうからなあ」

そして、ZINの口元が嗜虐的なゆがみ方をした。

「フン、その時は祝いの血潮をあげてやろうじゃないか。あの白

い肌を真っ赤に染め上げる、緋色の花を添えてな  
そうだ、楽しみは後に取つておこう。それだけ、緋色の花は華や  
かに咲き誇る。

俺の眼前では、犯人であろうと思われる池井が眼を大きく見開かせ、目元と唇を小刻みに震わせて俺の顔を見つめていた。両隣の一  
井さんと音蔵さんは驚愕の表情で隣にいる池井を見ていた。

「み、美音ちゃん・・・本当かい？」

「そんな、そんな事私！？」

池井はしゃべりかけてきた一井さんに必至で公言しようとした。

「いえ、池井さんが犯人で間違い無しですよ」

「じゃあ、証拠はあるんですか！？」

俺の発言に対して反抗するように前に出てきた。

「証拠ですか。証拠なら、あなただけがこの仕掛けができたと言  
うことがあります」

「へ？」

「どういう事だい？ 桐ヶ谷君」

俺の後ろから警部が聞いてきた。

「警部のガチガチ体石で証明されたでしょう、さつま！」

「ガ・・・ガチガチ！？」

「ガチガチでしょう。石体人警部」  
いしからだびと

「言いすぎだよ！」

「さて、さつき言つたことを言つてあげますよ。大きな証拠にな  
りますからね。さて、池井さん。一つ問います」

俺は警部を無視して池井に向き直り、あくまで冷たい目でみた。

「何でじょうか？」

「あなたは、体操をやつてましたね？」

「なぜ、それを？」

予想だにして無かつたかのよつなことを聞かれたのだろう、驚愕  
いっぱいの表情を浮かべた。

「やつさ、友里を迎えて行つたときに、あなたの手のひらを見ました。いや、見えたといった方が相応しいでしょう。あなたの手のひら側の人差し指から小指の付け根に角質が出来ていました。そこに視認で切るほどの角質が出来ているという事は、毎度毎度強い負担を掛けていたということが分かります。つまり池井さん、あなたは鉄棒をやつてましたね？」

「・・・・・」

「この仕掛けを作るには、俺みたいに運動神経が良く、バランス感覚がすば抜けて、関節が柔らかくて、このアトラクションの構造に詳しく、そして、自分の体重を腕一本で支えることが出来、持ち上げるほどの腕力がある人のみ。それを踏まえると、あなたが必然的に犯人なんですよ、池井さん」

「待つてください！」

前に踏み出してきたのは、音蔵さんだ。

「ミネちゃんは塩野先輩が殺された時、僕達と一緒にいました。

怪しい行動なんて一度も・・・」

「しなくてもいいんですよ。池井さんは、仕掛けをすればそれでいい。後は勝手に塩野さんが、このアトラクションを起動させれば、首がぶつ飛ぶんですからね。見方を大雑把に変えれば、自滅です」  
なるかなあ・・・。ならないようなあ・・・。ま、そこは今考えたところでどうこうできない。

「みたところ、あの壁にかけている時計は開園時間十時にアラームがなるそうで、覗き込みながらでも、覗き窓の右下にある起動ボタンを押せますからね。しかも、塩野さんがこの覗き窓を覗きこんでいる理由は、絶対に見られたくない物を取り出すため。自分の肩に、しかも服越しにピアノ線が乗つかつたなんて気付くはずも無い」  
「でも、それだからってミネちゃんが犯人だつて証拠には・・・」

そう音藏さんが必死に弁明をしていたところに、出入り口から警部の部下の人が、一枚の紙と、ポリ袋に入れたピアノ線を持ってきた。

「警部！」

「何だい？」

「桐ヶ谷君の言つとおりでした。ピアノ線に塩野さんの血液のルミノール反応のほかに、五個の血痕からもルミノール反応が検出されました！しかも、それが池井さんの血液型と一致しました。それと、これが池井さんの鞄から・・・」

警部は手を伸ばし、部下の人へ差し出してきた用紙を取り出した。

「これは・・・」

それに目を通した瞬間、警部は神妙な顔つきになり、隅々まで眼を通して、俺に手渡してきた。何で一般人である俺に手渡したのかは分からぬが、とりあえず受け取ろう。

俺は警部からその用紙を受け取り、一目した。そして、田がその紙から離れない。」いふは・・・。そして、俺は口元でゆつくりと微笑んだ。

「なるほど。これが、塩野さんが見られたくないものだったのか・

・・

それは、借用書だつた。嫌、正確に言えば偽の借用書だろう。よく出来ている。そこに書かれていた人の名字は、「猪唐」と書かれていた。つまり、これは容疑者の一人だつた、猪唐武雄さんの母親の借用書。どうやら、正確な手続きはせず、このトイチ以上の利子で貸していたのか。これじゃあ、れっきとした違法だ。そう、もしこれが誰かに知られれば、逮捕物だ。

「さて、証拠がさらに一つで、合計三つ。さあ、池井さん。あなたの言い分をお聞かせください」

池井は一向に口を堅くつぐんだまま黙り込んでいた。

「実音ちゃん？」

一井さんが池井の顔を覗き込む様に話しかけると、堅かつた池井

の口がふつと緩んだ。

「どこで気付いたんですか？」

たぶん、俺に聞いているのだろう。俺は鼻で小さく息を吐き、口を開いた。

「俺がさつき言った、推論じゃあ、あなたを犯人に仕立て上げるのは難しい。けど、他の従業員の話によると、あなたは今日いつもより早く九時ぐらいにここに来て、このアトラクションの裏から何も持つておらず、清掃員の服を着た女性が出てきたと言っています。あそこに入れるのはマスター・キーを持っている人か、このアトラクションのスタッフだけだと判断できます。でも、マスター・キーを持つている人は先の理由で容疑者から除外。つまり、犯人はただけだということになるんですよ。」

俺がそういうと、池井は力を抜くように息を静かに吐き、何か吹っ切れたような表情を浮かべ、尚下を向いて俯いていた。

「そう、君の言つ通り。塩野君は私が殺しました」

俺は数回小さく頷き、息を吸った。

「差し支えなければ、動機をお話できますか？予想はしていますが、確証性が無いんで」

「はい。刑事さんが知っている通り、私は塩野君と二年間交際していく、別れています」

「ああ・・・そういうえば塩野の奴が凄惨に寒苗ちゃんをふつたんだっけ？」

一井さんが池井の顔を覗き込むように聞いた。

「はい。でも、それだけが動機なんかじゃないんです・・・」

「へ？」

後ろで音蔵さんが顔をゆがませて疑問の顔を浮かべた。警部の顔だつて、田元がぴくつと動いた。ちょっととイレギュラーだつたな。

女心はやつぱり分からぬ。（展開もちょっと速いな・・・）

「彼は私と別れた後、他の人とまた付き合い始めて、でもそれだけじゃ別に殺そなうなんて思いませんでした。けど、彼はその後これ

見よがしにその彼女とのシー・ショットを見せつけてきて、その後もお前とは違つてとかを口癖に私に文句を言つてきて、それがエスカレートし始めて、それで・・・

「殺したんですか。今日に至つて」

俺は彼女を見下げて静かに言つた。あくまでも冷たい口調で。

「はい。ここは、塩野君と私が付き合い始めるときに、彼に告白された場所なんです。だから、ここで始まつたのだから、ここで終わらうそうと思って。それに、これ以上塩野君が何かを隠し通そと苦しんでいる姿を、見たくも無かつたんです」

「つまり、塩野さんを殺したのは、憎しみもあるけど、愛もあってこそ、だつたんですか。殺人こそが、自分の苦しみを消化するための手段であり、塩野さんを苦しみから解放してやる方法でもあった、と考えたわけですね」

俺が何度も小さく頷き、かつてともいえる解釈を述べた後、鼻で小さく溜め息を吐いた。池井は膝を突き、両手で自分の顔を覆い隠し、すすり泣いた。

「すいません。本当にすいません・・・」

泣き声に混ざつて池井のその「すいません」という声が何度も俺の耳の中で響いた。苦しみから解放させるための殺人・・・か。正直言つて、反吐が出る。それを表現するがごとく、俺は池井から皿をそらし、舌打ちをした。あいつも、こんな事が動機で人を何人も殺しまくっていた。前の俺じゃあ共感するだろうが、今の俺は共感するどころか、軽蔑に値する。殺人はどんなことがあっても、理由には変えられない、最低な行為だ。

警部は泣きじゃくる池井の背中を何度も叩き、顔を覗き込んだ。

「君はまだ若い。君が望み続ければ、罪は償える。生きて罪を償

お

「はい・・・」

警部にそう言われて池井は立ち上がり、警部とその部下達に連れられるよその場から去つていった。

時変わつて、今はもう口を超えて午前一時だ。高校生が一晩一緒に過ごしてしまつた！普通はアダルティックな展開だが、さつきまで事件の調査だったんだ、しうがない。俺はそう割り切つて、エリーに対する言い訳を考えなくてはいけなかつた。さて、どうするだろう・・・。俺がそうほんやりと考え込んでいると、後ろで友里の歩みが止まつたことを感じた。

「？」

俺はすぐに立ち止まり、友里の方へ振り向いた。

「どうした？」

ほぼ棒読みだけど、俺は口を開いた。

「ねえ、一真」

「ん？」

「私が苦しんで、もうどうしようもない時、一真ならどうする？」

池井さんは殺人で、何とかしてたけど、一真もそうする？

「するわけが無い。反吐が出る」

分かりきつているだろ。何があつても人を殺す理由には変えられない。

「俺なら他の方策を探す。人を殺すなんて事、サブにも入れられない選択肢と思つてる。俺はあの人には共感できない」

俺がそういうと、友里は力が抜けたように小さく息を吐き、俺に微笑みかけてきた。

「そつか、良かつた」

「ん？」

「私だけがかなつて思つてたから。どんなことがあつても人を殺す理由には変えられない。あの時も、一真是そう言つてたしね」

「・・・・・」

あの時か。そう言えば、何度も呟いてたな。「どんな事があつて

も、人を殺す理由には変えられない」つて。

よく覚えてるな、そんな事。俺が思つてる以上に俺の言葉つてこいつに影響ありなかなあ・・・。

俺は少々首をかしげると、視界の傍らにゴシゴシ体型の男が走り行く影が見えた。もちろん逃しもしなかつた。さつき、ホワイトシリバーのロングヘアの真っ黒い服装をしていた男とぶつかりそうになつたが、その男も同じようにしたから上まで真っ黒かつた。なんだか、このパターンは似ているような気がする。それに、逃してはいけないような気がする。新一もこう思つたのだろうか・・・。

俺はその男が消えた暗闇を目で追つた。

「どうしたの？」真

横から友里が俺の顔を覗き込んで、俺の視線を追つて、暗闇を警した。

「何があつたの？」

「いや、なんでもない」

俺は小さく息を吐いて、友里に向き直つた。

「友里、先に帰つてくれ」

「へ？」

「ちょっと、忘れ物してさあ。取つてくるから」

もちろん嘘だ。あんまりこいつには悟られたくないからだ。

「へ？でも・・・」

友里が自分の胸を抑えて俯いた。そんな友里に対し、肩をポンと手を友里の肩に置き、一回だけウインクした。・・・無表情だけど。

「大丈夫だつて、お前なら。襲われてもお得意の空手で返り討ちに出来るだろ？それに、何もどつかに消えちまうわけじゃないから・

・な？」

「う・・・うん」

友里は小さく俯き、納得してくれた。これで、何があつても歯切れがいいな。

俺はそつと友里の肩から手を放し、バックして離れていった。そのまま、俺は友里に背を向け、走り去っていった。

けど、俺はその時知らなかつた、この選択肢は決定的に間違つてしまつているということを。

『エリー、終わったヨ。事件』

またしてもうたた寝してしまつてゐるエリーを起こすべく、ジュー

ールはエリーを無線越しにかかりかけた。もちろん、大音量で。

「ふにゃ？」

エリーは目をぱしばしさせて、目を何度も「じじ」とこすつた。

「終わつたの？ ジュール」

寝ぼけ声で言つたエリーの声は、猫をイメージさせてしまつ。これにエリーが猫耳装着なんて事になれば完璧だ。

『ウン、終わつたネ』

「分かつた」

そうすると、エリーは「うわあああ……」と声を出しながら、背伸びをして、立ち上がつた。空は漆黒の闇に包まれ、一面を黒くしてゐた。しかし、下は遊園地の光によつて明るく照らされ、しつかりと見える。そう、一真が友里の肩に手を置き、何かをやつてゐる場面だつてもちろん丸見えだ。

「……」

ままま・・・まさか！？ エリーは顎に手を当て、ひつそりと覗き込み、口をがくがくと震わせた。

しかし、期待に反して、一真はそつと方から手を放し、ゆっくりと友里からはなれ、そのまま彼女に背を向けて、走り去つていつた。

「？ どうしたんだる」

気になつたエリーはそう呟き、一真が向かつた方向へと追跡するため、建物の間をひょいひょいと飛び越え、一真を陰ながら追跡して行つた。

## STAGE 8

俺はさつき俺達の前を走りすぎていった、「ゴツゴツ体型の男を追つて、人ごみを搔き分けて狭い道に入つていった。

ここまで来てしまえば、アトラクションやお店が集まっている光は届かず、暗くてまともに前ですら分からぬ。唯一つ、月明かりがこの道を照らしているだけだ。

しばらくその道を走つていると、人が二人会合しているのが見えた。その内の一人がさつきの「ゴツゴツ体型の男で、もう一人がはげ頭のタル体型で、濃い赤色のスーツを着ている。

俺は新一がしていったように陰に隠れてその二人の様子を伺つて、二人の会話を聞き耳を立てていた。

タル体型の男が（以下「タル」）が「ゴツゴツ体型の男（以下「ゴツゴツ」）の前に銀色のアタッシュケースを差し出した。よくドラマで大量の金が入つているという演出に使われているあれだ。ゴツゴツはポケットに手を突っ込みながら、偉ぶつている。どうやらあの男の方がタルよりも上のようだ。

「こここ、これでいいだろ？」

とタルが空けたアタッシュケースの中には、無数のファイルと、大量の金額が入つていた。多分桁が十位あるぐらいの金額だ。俺はそれに目を細めてそれを息を殺して静観した。

「へ、よくやって來たじゃねえか。ほらよ」

と、ゴツゴツがポケットからUSBアダプタと、マイクロカードが入つたポリ袋が取り出され、それをタルに放り投げた。彼は、それを慌てて受け取ろうとして、しばらくの間あたふたとして取りそこのないそうになり、落としそうになつたとき何とかキャッチした。

（なんだ・・・あれ。どつかの社長さんか？さしづめ会社内ではまたくない物でも入つてるのか？そして、それがバレて、それを弱みに握られ、大金となんかの情報と引き換えに、そのデータの入つ

たファイルを受け取るつて言つことだつたのか……）

けど、これは逃してはいけない。俺はポケットに手を突つ込み、携帯を掴んで・・・・・・・・・。

構わず後ろにバツクキックした。

その瞬間、「ぐつ！？」といつ小さな男のくぐもり声が聞こえ、ザツザツと一歩ぐらい草むらを後ずさる足音が聞こえ、カラシッと金属製の何かが転がり落ちる音が聞こえた。俺は携帯を掴んでいた手を放し、ポケットから手を出して思いつきり蹴飛ばした人物を見た。

「お前・・・」

その人物は俺に見覚えがあつた。下から上まで黒ずくめの服を着て、黒い帽子を被る、ホワイトシルバーのロングヘアをした男。さつき、ぶつかりそうになつた男だった。そして、さつきから右目がうずくような感触がある。

その男は体を真つ直ぐにして立ち上がり、口元で嗜虐的な笑みを浮かべた。その笑みにほんの少し寒気を感じてしまったのは言つまでも無い。冷たすぎる笑みだ。

「ツ！」

後ろで、ゴジゴジが俺達の感づいて、俺の背後に立つた。見たところ挟み撃ちにされたという状況だ。

「まさか、俺の気配に感づいていたとはな」

「ああ、五感は常に研ぎ澄ませている状態だからな。少しの足音でも感づく」

「フンッ、なるほどな。「不規則すぎる変換」を使って俺の気配を消したつもりだったが、まさか足音で気づくとは、じりやあ少々調整の必要だな」

「「不規則すぎる変換？」  
アンソニッシュトコード

何だ、それ。俺は目を細めて、その男が言った言葉に疑問を持つた。そんな言葉なんて、この世界には……いや、もしかしたら・・・。

俺は荒い息を吐きながらその男の冷たい目を見つめていた。

（ヤバイ・・・。こいつ、向こう側の人間だ）

俺が息を呑むと、後ろのゴシゴシが前に踏み出すのが聞こえた。

「アニキ、こいつは・・・」

「気にするなウォライ。ただのネズミだ。ここで消しておけば何の問題も無い」

俺は後ろと前を交互に見やり、最後にホワイトシルバーのロングヘアーをした男の目を見やつた。

（相手は俺が向こう側に関わっていることをまだ分かっていない。  
だったら、境界は発動させないはず。発動させたら現実側の人間は殺せねえからな。単純な格闘なら相手できる）

俺は右拳を握り、後ろの気配に注意を払いながら目の前の男を睨みつけた。すると、目の前のホワイトシルバーのロングヘアーをした男は黒いトレーナーのうちポケットからサイレンサーつきの拳銃を取り出し、俺の体に照準を向けて引き金を何のためらいもなしに引いた。

サイレンサーによつて抑えられた銃声が俺の耳に入つた瞬間俺の目の中に回転しながら飛んでくる銃弾が視認で来た。

俺の目は銃弾を見切ることが出来る。俺はすかさず右にかわし、左手の五指をそろえてピンチと立てて、ホワイトシルバーのロングヘアーをした男の顔にめがけて突き出した。

「フン・・・」

そして、顔を傾けてかわされた。でも、計算内の範囲だった。俺は左足を踏み込んで右足で相手の顔にめがけてハイキックをした。しかし、その相手は左手を自分の顔の左横にやり、そのキックを防ぎ、銃を地面に落として俺のみぞおちに向かってフックを仕掛けて

きた。

「クツ！」

俺は防がれた右足を強く押し出して飛びのき、パンチをかわせた。すると、後ろからパシュツ！という音が聞こえた。その音が聞こえて一秒もしない間に俺は右側にしゃがんだ。すると、目の前の男の地面が爆ぜた。どうやら、後ろからゴジゴジが俺にめがけて射撃したようだ。後ろを向いてみると、ゴジゴジが持つ銃から煙が出ていた。ゴジゴジは予想外の光景に口元をゆがませて銃を少し下ろした。

「アニキ、こいつ・・・」

「ああ、どうやらこいつは銃弾を五感で感じ取り、それをかわすなんて曲芸じみたことが出来るようだな。おもしろい・・・。ウオライ、下がつてろ」

「あれをやるんですかい、アニキ」

「ああ・・・」

すると、目の前のホワイトシルバーのロングヘアをした男は冷たすぎる目を俺に向け、口元をゆがませ、笑みを浮かべた。すると、その男は銃口を俺に向けた。そして、引き金を・・・。

(ツ！？)

俺の視界の中で血潮が吹いたのが感じ取れた。そして、肩に力が入らない。

「グツ！」

(何が起こつた！？何が！？)

俺の思考では到底考えようも無かつた。そして、急激に口に言いようも無い痛みが俺の体を襲い、俺の思考を根こそぎ奪つていった。俺は肩をもう一方の手で押さえ、そこから出でくる血を押さえた。しかし、そうしてしまっては銃弾を避けることが出来ない。分かれきっていることだ。

銃声と銃弾が飛んでくるタイミングが全然合つてない。俺に銃声が聞こえる前には俺の体には銃弾によって貫かれたり、銃声だけが先走りして、銃声が聞こえなくなつたときに銃弾が俺の体を貫いて

いつた。そして、足に当たったとき、俺の体はガクッと少し下がり、バランスが崩れた。

その隙を突くように、ホワイトシルバーのロングヘアをした男は次々と引き金を引き、俺の体を貫いていった。

しばらくすると、乾いた銃声と、銃弾が飛んでくるタイミングが合ってきた。いつもの俺ならかわせる。しかし、銃弾によって体を貫かれ続け、体の血が足りていらない今、意識は朦朧として、五感の感覚が鈍ってきた。

俺の体は乾いた銃声と共に次々と貫かれ、俺の体はその銃弾が被弾した直後の衝撃によって、何歩も後ろに追いやられ、そして、銃弾が俺の右肺を貫いたときに、俺は仰向けに倒れこんだ。俺ではもう体を支えることが出来なくなっていたからだ。肺が一個やられたせいで呼吸をするたびに血の塊が俺の口から出てこようとする。しかし、俺が仰向けに倒れているせいでその塊は俺の喉に留まり、俺の喉の気道を塞いでしまっている。

ホワイトシルバーのロングヘアをした男と、ゴジゴジは俺の前に立ち、俺を見下した。

どっちも笑みを浮かべているが、俺が何よりも釘付けにされたのはホワイトシルバーのロングヘアをした男の方だった。あの冷たすぎる笑いはこれまで何人もの人間を殺してきたという笑いだった。

「お前が俺に一撃をかませたことはほめてやる。そして、あのアトラクションの事件を解決してくれたのも感謝している。あれだけのサツの前じゃあ、取引もまともに出来なかつたからなあ」

そして、俺が見ている男の方が俺の方へ銃口を向けた。

「お前のその整つた顔立ちはしっかりと綺麗に残しておいてやるよ」

そして、引き金に触れ、口元での笑いが大きくなつた。

「じゃあな・・・名探偵」

「どこに行つたんだろ」

エリーは建物の屋上を飛び越えながら、一真が消えた方向に向かい、探し続けていた。でも、やっぱり見つからない。なにせ、下は暗闇だ。園内とは違う。

「んん・・・ねえ、ジユール。分かつた? 一真の場所」

『キミから八時の方向すぐ下にいるネ。ずっと立ち止まってる』

「そうなの?」

エリーはPLDの無線から顔を離し、自分の体から八時の方向へ走り、建物の陰に隠れながら下を見下ろした。

「あ、あれ」

エリーの目線の先には仰向きに倒れている一真の姿があった。寝ているのか? それにしても、不自然だ。転んだにしても、不自然にもほどがある。エリーはもう少し目を凝らし、一真を見下ろした。一真の下に何かがある。草むらのほかに、何かが、一真の背中に敷かれている。あれは・・・。

(まさか!)

エリーの頭の中に悪い直感が働きかけた。

「一真!」

エリーはすかさず、建物から飛び降りた。かなり高い建物だから、普通飛び降りればお陀仏、飛び降り自殺になる。しかし、エリーの体にある性質<sup>カタストロフ</sup>の力を制御すれば、着地することは容易だつた。

エリーは、自分の体の中の性質の力を足に集約させ、足の方が頭よりも重くした。そして、着地の瞬間、纏わせた性質<sup>カタストロフ</sup>を爆発させて、それをクッシュョンにさせて無事着地した。

「一真!」

エリーは慌てて一真に駆け寄った。数馬の体の近くに来ると、ピチャッと言ひ何か液体を踏む音がした。間違いなくそれは、一真の

血だつた。一真の体は自身の体から流れ出てきた血によつて漫られ、仰向けに倒れていた。

彼の体は銃弾らしき者で体中を貫かれ、そこいら中に銃弾によつて出来た穴が出来上がつていた。しかも、そのうちの一つは、左胸を貫いていた。

(そんな・・・いや!)

これじゃあ、夢の通りだ。このままじゃあ、一真是死んでしまう。自分達の前から消えてしまつ。エリーはしゃがみこみ、何度も体をゆすつた。

「一真！一真！一真あ！」

しかし、何度も起きた氣配がない。血を失いすぎた。エリーは一真的手を握つた。

「冷たい・・・」

エリーの胸のうちから何か良くならない感情が込み上がつてきた。自分の目元が熱い。

「いや、嫌だ、一真。死んじゃだめ！」

その必死の問いかけに対しても一真是答えない。

どうすればいい。今救急車を呼んだとしても、着いた頃には完全に死んでしまう。どうやれば一真を救える。

エリーは涙をこらえながら一真的顔を見つめた。そして、咄嗟に動いた。一真的ズボンのポケット全部を探つた。

「あつた！」

一真的來てゐるシャツのポケットに何かがある。多分、彼のP.L.Dだ。

エリーはすかさずそのポケットに手を突っ込んで、そのP.L.Dに触れた。しかし、軽率な行動だつた。「ツー！」

指先が触れた瞬間、自分のその指先が焼きつかれるような傷みが走つた。そうだ。あのときだつて経験済みだつた。彼のP.L.Dを調べるときに、自分の手のひらが焼きつかれ、焦げてしまつていたと言つことを。

でも・・・。

エリーは再び彼のポケットに手を突っ込み、PLDを齧づかみした。その瞬間、自分の手に激痛が伴った。しかし、これに一々反応してたら一真が死んでしまう。エリーはあの時と同じようにその痛みをこらえて、ポケットから引き出し、自分の手が激痛によつて動かなくなる前に、一真の腕に彼のPLDを巻きつけ、装着した。

「ジユール！私と一真をそっちに送つて！」

『へ？何・・・』

「早く！一真が死んじゃう！」

『わ、分かつたネ』

そうジユールが言つと、無線の向こうでカタカタと何かのコードを打つている音が聞こえた。

（早く、早く！）

エリーは一真の冷え切つた手を握りながら、祈り続けた。

『よし、状況も把握したネ。今すぐこっちに送るね。一真の手を握つて』

「うん」

『じゃあ、ちょっと気持ち悪くなるネ』

ジユールがそういうと、エリーの視界がブラックアウトを起こした。とんでもない車酔いと同じような感覚がエリーを襲つた。

俺の意識は泥沼の中に浸つていていたような感覚だった。動こうにも動けない。目を開けようにもあけれない。俺の全ての五感が消失してしまつていてるような感覚だった。呼吸ですら、何かに任せて酸素と一緒に酸化炭素を入れ替えさせられているような感覚だ。

そして、先に戻ってきたのは嗅覚だった。消毒液の匂いが鼻に突き刺さる。その後に戻ってきたのは痛覚だ。自分の両肺が大きなダメージを負い、息を吸うたびに胸が痛くなる。しかも、何かが俺の

腹の上にのっかかっている。

そして、ようやく視覚が戻り、周りが見えるようになった。見た

ところ、どこかの病院だろう。

(助かったのか・・・、俺は)

そして、俺が気を失うほんの少し前のことが俺の頭の中でフリッシュバックして映像が浮かんだ。

### じゃあな・・・名探偵

俺はその言葉を、あの男の冷たすぎる目と笑いを思い出し、目を大きく開いて、自分の心臓が激しく打つのを感じ取った。

俺は口元につけられている酸素マスクを取り外し、上半身を起こそうとしたが、力を入れると体の節々が痛む。それに、何かが俺の腹の上にのっかているのに起き上がりがれる筈がない。

俺はちょっと枕に頭を寝転がせた後、息を吐き出して首を起き上がらせて、その俺の重石になっている正体を見た。

漆黒の張りのあるその人物の腰辺りまで伸びるロングヘア。頭のてっぺんから生えるアホ毛。整った顔立ちに、透き通るような白い肌の少女だった。そう、俺が知っている少女だった。

「エリー・・・」

俺はぼやける意識の中で、呟いた。

(こいつ、俺に掛かりつきりだつたのか)

そう思うと、俺は笑みをこぼし、エリーの頭頂部を毛並みに沿つて撫でてみた。

「うん?」

エリーはその感触に反応するかのように、目を開けて、俺の顔を目が半開きの状態で見つめた。俺がほんの少し笑みを浮かべるとエリーの目が見開いた。明らかな驚きの表情だ。そして、その後は

目に涙を一杯に浮かべてしゃくりあげてきた。

「一真あ！」

「おつと・・・」

俺は顔面めがけて飛び込んできたエリーの顔を軽く押しやり、撃墜させた。

「いっち！」

エリーは後ろから引けて、尻餅をついた。

「いったー・・・」

そして、エリーは俺の満足そうな顔を見るなり、しかめつ面になつて立ち上がつた。

「何するのよう！」

「不審者が俺に飛び込んで来たと思ったから、つい反射的に」恩もへつたくれも感じていなさそうな発言したせいで、エリーが頬を膨らませてさらりに強く俺をにらんで来た。おお、怖い怖い。

「せつかく心配してあげたのに！誰があそこから、むぐっ！」

エリーは何かを言いつになつて自分の両手で自分の口を塞いだ。しかし俺の耳は逃さない。さつき「あそこから」と言つたな。という事は・・・。

「お前か！俺に後ろから冷たい視線投げていたのは！イテテテテテ・・・・・」

秘密の暴露だ。俺はガバッ！と起き上がり、エリーの威圧を跳ね除けるぐらい大声で怒鳴った。その瞬間、俺の胸の辺りが苦しくなつてしまふ、体中が悲鳴を上げんばかりに激痛が走つた。

あれ？ そういえば俺の眼鏡は？

あつたところで俺の行動に何の支障がきたされないけど。あれ伊達眼鏡だし・・・。（実のところ、俺の視力は両目共に2・5だつたりする・・・）

俺は辺りを見回し、伊達眼鏡を探した。ま、すぐそこにあつた台に乗つけてあつてすぐに見つかつたけど・・・。

俺はそれを掴んで、黒縁の伊達眼鏡を掛けた。

すると、この病室の扉が開いて、誰かが入ってきた。男の人で、金髪のショートヘアで、目の色が水色のアメリカ人っぽい人。イケメンの部類に入りそうな人物のその人は俺の顔を見るなり、明るい笑顔を振りまいて、手の平をひらひらと振った。

「ハーアーイ！カズマ。元気にしてたカーアイ？エリーと恋人ゴツコなんかして、夫婦円満カーアイ？」

「ジユール！」

エリーが顔を赤くして怒鳴つた。

（ん？ジユール？あれ・・・あれれ？）

状況が飲み込めない。何でジユールが？っていうか、こいつがジユールか？

「あれ？カズマ、案外びっくりしたカイ？そつかあ、カズマはボクの顔知らなかつたもんネ。改めてはじめまして、桐ヶ谷一真クン。ボクはジユリアル・フォール。まあ、略してジユールって言われているんだけどネ」

「・・・・・」

うつわあ。声と見た目のギャップが激しすぎて頭が覚醒わずか数秒で混乱してくる。俺はその混乱を振り払うかのように頭を横に振り、息を整えた。

「それもあるけど・・・なんでお前が、こんな所にいるんだよ

「ン？逆の立場ネ。キミが、こっち側に着たんだヨ、カズマ」

「・・・・・・ん？」

俺の頭の中の思考回路が全てやきつくされてしまったかと思わせるように、一瞬頭の中がリセットされてしまった。数秒で戻った後、一度空っぽになつた頭の中でいろいろと考え込んだ。

「待て待て。じゃあ俺がいるここは『ゲーム仮想』側の世界なのか？」

「ンン・・・『ゲーム仮想』側の世界というのはあんまりふさわしくないね。エリーがそんな変なことを吹き込んだに違ないけど・・・

「

「ジユールのバカア！」

後ろでエリーが顔を真っ赤にして怒鳴っているのが見えた。ジュー  
ールは大きく頷いて手でその怒鳴り声を押さえた。

「まあ、言うなればキミは『他次元』<sup>たじげん</sup>、つまり『パラレルワール  
ド』にやつてきたという訳ネ」

「・・・・・・・・・・・・」

元から俺の日常はエリーとあつた日から狂つてゐるつていうこと自  
体は把握していたけど・・・。

狂いすぎなのだろう。これは・・・。

## STAGE 9

「で、カズマ。キミは一体どれだけのことをエリーから聞いたんだい？」

「へ？そりゃあ、性質の事とか、他次元同士がつながってしまった事とか、零れ物の事とか・・・。結構いろいろなことだと思う」

「フーン、じゃあとりあえず言って見てヨ」

「ああ・・・」

俺はうなずいて、とりあえずエリーから聞いたことを口にしていった。性質<sup>カタストロフ</sup>は全てで風・林・火・山・雷・陰の六つで、全ての人々はそれのいずれか一つを宿していること。『現実』<sup>リアル</sup>と『仮想』<sup>ゲーム</sup>・いや、他次元がつながり、その次元では本来存在しないものが存在してしまっているということ。P.P.Aや、リンクーのこと。このP.Dの事も全て聞いた通りに言つた。すると・・・。

「ふ・・・ブハハハハハッハハ！」

いきなり笑い転げられた・・・いや、何も変なこと言つた覚えがないんだけど・・・。

俺は苦笑いを浮かべながら、心の中で突っ込んだ。しかし、ジユールは笑い転げてバタバタと手足を動かして大爆笑している。うつわあ・・・。デカイ体がこんなド派手に地面に転がつて爆笑しているという光景はある意味滑稽だ。

「ジユール！！」

エリーが顔を真つ赤にして、怒鳴りつけた。その瞬間、ちょっとずつではあるがジユールの笑い声がどんどん小さくなつていった。それでも笑いは続く。

「ハハハ・・・イヤア、キミの事じゃないヨ、カズマ。エリーの教え方つて・・・ブツク・・・」

「ジユール！！！」

更に大きく怒鳴つた。そもそも、聴覚も大分戻ってきたようだが、

エリーのこの怒鳴り声の大音量のせいで、もうこれ以上回復しそうになくなってしまいそうだ。

「エリー、教えるときはしっかり細かく正確に教えなきや。じゃないと、後でとばっちりが飛んできちゃうぞ。さて、カズマ。キミから聞きたいことは山々だけど、まずはキミのその間違った知識を塗り替える必要があるね。まず第一、性質カタストロフは六つしか存在しないといふのは、エリーの嘘つぱちだ。多分、エリーが説明めんどくさがつて、そこら辺を端折つたんだろうネ」

ジユールのその言葉の瞬間、はっと顔を硬直させ、頬を膨らませた。

「もうー、ジユールのバカ！ 馬鹿バカばかあー！」

そういうと、エリーは掛け布団越しに俺の脚に倒れこみ、グツダリとなだれ込んだ。グツタリを通りこして、グツダリだ。

あのう・・・そこも結構ダメージ来てるんですけど・・・。

俺は少々顔をしかめ、痛みをなるべく顔に出さないようにして、鼻で小さく溜息を吐いた。

「どうこう意味だ？ ジユール。それって、例外とかあるのか？ 特異性質オースに」

俺のその食い込むような質問の仕方にジユールは少々、体を後ろに倒れこむようにさせて、腕を組んで考え込むようなじぐさをした。

「ウーン、例外ネエ・・・。余りそういう風に表現するのはよくないネ」

「例外じゃないにしろ、エリーだつて特異性質なんだろ？ 俺から聞いたら、お前はエリーは別にして当然のタイプだつて言つてるようになれるぞ？ こいつだつて珍しいじゃないか」

その言葉とともに、ジユールは困ったような表情を浮かべ、後頭部をポリポリと搔いた。

「ウーン・・・確かに、それは言えてるね。エリーは通常の特異性質オースじゃない。彼女は二つ三つどころか、風・林・火・山・雷・陰のこの六つのタイプの性質カタストロフを使えるね。いわば彼女は、「全六ぜんむ」の

性質<sup>カタストロフ</sup>ネ。でも、今ボクが話しているのは、そんな根本的なことじやない。もつと・・・ウーン、大雑把な範囲で、その六つの性質<sup>カタストロフ</sup>についての事なんだヨ、カズマ」

「どういう意味だ？」

「つまり、このエリーの性質<sup>カタストロフ</sup>も、結局はそのうちの六つのうちの一つということなんだ。属性は全部で六つ。彼女は単純に、その六つだけを使い分けることができるんだヨ。そしてキミは、特異性質<sup>フォース</sup>をその多数の属性を併せ持つ物の事を言つていると思っている、違うかい？」

「あ、ああ」

こいつ、こんなへらへらしていたり、脳天お氣樂者だと思つたら、たつた一だけを話したのに、そこから七か八ぐらいを一気に読みとつてきた。思つている以上にジユールというやつは切れ者みたいだ。これは油断していたら、一気にその弱みに付け込んでくるタイプだ。ジユールはパチンッと指を鳴らし、その際で立てていた人差指で俺を指さした。

「それこそがエリーがキミに吹き込んでしまった間違つた偏見ネ」その瞬間、俺の脚にうつ伏せているエリーの体がぴくっと蠢いた。多分怒りのサインだ。誰かがここで抑えてやらねば爆発してしまつ。

「エリー」

俺がエリーの名前を呼ぶと同時に彼女の体がピタリと止まった。あのう・・・まだ俺何も言つてないんですけど?しかも、俺の脚のあたりがぼうっと熱くなってきた。ほんのりとエリーの体熱が俺の脚を包む。

「で?それはどういう意味だよ。違つているのか?」

「イヤ、五十パーセントはあつてている。でも、そのほかの五十パーセントは完全に間違つてている

「?」

俺は首をかしげた。

「ということは例外が存在するのか?」

その瞬間、ジユールはフフンッと笑いだした。俺また何かおかしいこと言つたのか？

「カズマ、特異性質<sup>一ス</sup>に例外は存在しないヨ。つていうかもう特異性質事態<sup>一ス</sup>が例外そのもの。例外に例外なんて存在しないネ。ウン、でもカズマが今気になつてゐる例外といふものは、確かに存在する。でも、その例外といふものは決してどれの型に当てはまらない、全くの規格外の性質サ。そしてその「型」というのが、性質<sup>カタストロフ</sup>の属性は必ず六つしか存在しない、というパターンサ。でも、そのどれでも無くて、しかもそれに奇異な力が宿つていたら？それこそがまさに規格外、全次元のパワーバランスが狂いかねないぐらいの規格外のレベルサ。そして、そのお墨付きの規格外が、キミだつてことサ。

カズマ」

ジユールはあくまでも表情は崩さず、ただし、ほんの少しシリアスさを含めて、声を低くして俺に告げた。

「お、俺？」

俺の完全にポーカーフェイスではいられなくなつた。自分の存在がそんな特別な存在だとは、思つてもいなかつた。

確かに俺はあの時エリーに、「お前は存在していないのかも知れない」と言われたことがあるが、あの時はポーカーフェイスを貫けた。理由としては簡単。単純に俺が認識されてなかつたからだという解釈だつたからだ。いわば、単純な機械のほうの誤作動。大して特別でも何でもない。俺は単純に見過<sup>ご</sup>されてしまつてしまつていた。しかし、特別だと言つてしまわれば話は別になつてしまつ。特別ではないから、先の解釈が理解できて、筋道が通る。しかし、特別だと言われてしまえば話は別だ。俺は俺の存在を疑つてしまつ。

俺は右手で頭を押さえ、がりがりと頭を搔き鳩つた。

「結構パークツテいるネ。けど、ここに桐ヶ谷一真は確かに存在している。じゃないと、キミがあの二体を回収してゐるはずがない。そうだろ？単純にキミは他と特別すぎているだけ。そう思つたほう

が気が楽でしょ」

俺はジユールから田を離し、なんども小さく首を縦に振った。

「ああ・・・確かに樂になつてきた。じゃあ、教えてくれよ」

俺はストレートに聞いた。

「俺の性質は何なんだ?」

するとその問いかけに、ジユールは口をぽかんと大きく開けて、息を吐きだした。

「聞いてくるということはわかつてたけど、そんなストレートに聞いてくなんてネ。ウン、だつたら教えてあげるよ」

そして、ジユールは背筋を伸ばし、俺を見下げてから、エリーが座つていた椅子に腰かけて、前のめりになつた。

「確証はないけど、キミ、桐ヶ谷一真の宿した性質は、『天』だよ。英語に直すと、Heavenだネ。まさに天の意思だネ。相手が使つてくる技全ては我が生み出したものが如く、全てを投影し、コピーして見せる。まさに、相手の努力全てを侮辱してしまつ、性質ネ」

「ジユール！」

俺の脚にうつ伏せていたエリーがガバッ！と起き上がり、思いつきり怒鳴りつけた、しかも、起き上つた時の衝撃で、俺の脚にダメージが・・・完治するかなあ。

「そんな言い方ないでしょ！」

「まあまあ、エリー。单なる比喩だヨ。カレだつて、なりたくてなつた性質じゃないんだ。それぐらいキミだつて理解の範囲だロ？」「真正面からジユールに言い負かされたエリーは、シクンとしょげて顔をうつ向かせた。まあ、確かに俺がなりたくてなつた性質じやないからな。ジユールの言つことには一理ある。

「で、俺が持つてている特性が技の投影だつたら、他もあるのか？」

「ウン？まあ、あるつちやあるヨ。たとえば、ボクの性質は『山』だから、大地の振動を足を通して読みとることができて、『火』の性質は多少の高熱の物でも触れることができる」

ん？今何て言つた？多少の高熱のものなら触れる？

「待て待て、じゃあエリーの猫舌は何なんだ？こいつは確かに全六の性質<sup>カタストロフ</sup>使えるけど、本質は『火』なんだろ？お前が言つてることと矛盾してるぞ？」

と、ズビシッと横目にエリーに指さした。指さされたエリーは「むつ」とくぐもり声をあげて仰け反つたが、そのリアクションの追及についてはここはスルーだ。

ジューールは俺の問いかけに対し、笑いの表情を浮かべ「理解しました」とかいうしぐさを見せた。

「ああ・・・彼女は例外。彼女の中に「全六」の性質<sup>カタストロフ</sup>が宿つてしまっているせいで、それぞれの特性を打ち消してしまっているんだ。だから、彼女には実質的に特性は存在しない。今こいついう状態の時の彼女は、見た目がかわいいだけの女の子だよ」

「だけって何よ！」

俺の横で大声で怒鳴るエリーに手の平を向けてジューールはうなずいてエリーを制した。制したところで俺に降りかかる耳のダメージはどうしようもない。もう勘弁してほしい・・・。

「で、これでキミが持っていた誤解の一つが解けたわけダ

「まあな

確かに、俺は今までエリーみたいにたくさんの種類の性質<sup>カタストロフ</sup>を持つているやつを特異性質<sup>フォース</sup>だと思っていた。だって、そのことに関する話は全く説明しなかった。「私みたいな例外」っていう風にしかいつてなかつたからな。てっきりそう思つてたぜ。それにしても・・・。

俺はじと目でエリーの顔を見た。

なんでそういう情報は言わなかつたのかなあ。つか、端折つたんだ？こいつ。

エリーにそんな心をアイコンタクトで伝えると、「むつ」としかめつ面になり、少々頬を膨らませた。普通の男なら憮殺だなこりや。耐性あつてよかつた。

「で？」

「ン?」

ジユールは目を大きく見開き、「何を聞いているんだい?」みた  
いな表情を作った。いやいや・・・。

「他にあるのか?」

「何が?」

惚けているのか、マジで分かっていないのか分からない。

「俺が誤解していること」

「その前に・・・」

「その前に?」

俺は生睡を飲み込んでジユールの次の言葉を待った。何やらえや  
意の知れないことを言い出してしまうのかもしない。そのためには  
心の準備をしておかねば・・・。

「キミを襲つたヤツの特徴、覚えてる範囲でいいから教えてくれ  
ないカイ?」

「?」

拍子抜けだつた。何やらトンでもない御発言をしてしまうのかと  
思いきや、平凡じみた言葉だつた。当然と言えば、当然のような質  
問だつた。

「何を驚いているんだい?ボクは特といった関係を持つたヒト以  
外に情報をあげたら、何か見返りをもらつタイプなんだヨ。用はバ  
ランサー、バランサー」

「・・・・・・・・・・・・・・

何がバランサーだ。このまま行くと俺ばかりが得してしまつ。自  
分に利益を被らない、バランサーもどきだ。

俺は口を尖がらせながら小さく首を何回も縦に振つて、ジユール  
から目をはずした。

「ああ・・・」

そして、俺はあの男の表情を思い出した。冷たく、どこまでも冷  
たく、どこまでも黒く塗りつぶされていったようなあの男の笑みを。

「下から上まで真っ黒の服装をした男二人組みだった」

俺は語り始めた。

「へ？」

今、なんていった？下から上まで真っ黒の服装をした男二人組み？何か得体知れない物がエリーの胸のうちからこみ上げてきた。背中にここ感じていなかつた悪寒が走つた。しかし、一真はそんなエリーを脇目もくれず、自分を襲つた人物の特徴を語つていた。

「一人はゴツゴツ体系の男で、黒い帽子を被つてサングラスをかけてた。身長は遠くだからあんまり分からなかつたけど、たぶん俺と同じぐらいの身長だと思つ」

そう、もう一人が問題だ。一真是あの男の顔は一生忘れることが出来ない。あの男から出てくる冷たい圧力は余りにも異常だつた。

そして、エリーにとつても問題だ。すでに、その一人目の男の特徴が述べられていただけで、自分の心臓が激しく波打つているのが分かる。止めようにもどうしようとも止まらない。そうだ・・・そいつがいると言つことは、彼もいはばずだ。

「もう一人は細身の男で、俺よりも十五センチぐらい高い身長だつた。年齢は分からなかつたけど、声からして、たぶん三十から五十の間ぐらゐ。ホワイトシルバーのロングヘアに、白目の肌色。黒いトレーナーの下に灰色のハイネックの服を着てた。そして、冷たすぎる目だつた」

その瞬間、エリーの中で何かが壊れる音がした。物理的な物ではなく、内面的な何かが粉々に碎かれた。震えが止まらない・・・。エリーは震えるその両手で自分の体を包み込んだ。それでも震えが止まらない。エリーは白いワンピースの上に着込んだ赤い半そでシャツの両腕のすそを引っかくようにつかみ、必至で止めようとした。恐怖のせいで瞳孔が開ききり、呼吸が荒くなる。

「エリー？」

一真はそんな様子のHリーを疑問がり、首をかしげながら彼女の名前を呼んだ。しかし、いつも入るその少年の声は今は入らない。恐怖によって塗りつぶされた感覚が、その声と耳のつながりを断ち切ってしまう。

(いたんだ・・・やつぱり・・・いたんだ!)

あの時観たのは幻覚ではなかった。そこに、彼はいた。

S H E L Y · · ·

あのときの声が、再び耳の中でよみがえる。

S H E L Y !

彼が耳の中で自分のことを呼び、銃口を、明確たる「死」を、悪魔の笑いを浮かべながら向けた。

「はあ・・・はあ・・・」

動悸が激しくなり、しつかりとした呼吸が出来ない。しつかりと息を吸う事が出来ない。Hリーの手がぶるぶると痙攣を始めた。意識が自分の体から切り離されるような感覚を感じながら、Hリーはばたつとうつぶせに一真の体に倒れこんだ。

「Hリー！」

彼女を呼ぶジューールと一真の声が響いた。ジューールの手が、エリーの体をゆする。しかし、荒い呼吸をしているエリーは一向に顔を上げない。体がビクビクと痙攣して、まるでゲームで「痺れ」状態になってしまったかのように動かない。

「過呼吸だな・・・」

一真の静かな、そして心配しているのか少々弱々しい声が聞こえた。何故か恐怖の中でそんな一真の声をエリーは聞き取れた。ようやく耳に出来た一真の声を聞いて、エリーの心はほんの少し緩んだ。しかし、それと同時に、彼の、あの時の顔が、頭の中でフラッシュバックする。一真の声を塗りつぶしてしまう。真っ黒に染め上げてしまつ。

全てが、消されてしまう。

「駄目だな」

俺は溜め息混じりに、あたりをキョロキョロ見渡した。理由は分からぬが、単純な過呼吸だ。しつこいときの処方は初歩中の初歩だ。

「ジユール、何か袋ないか？紙袋……てか、この世界にあるかな」

俺が最後呟き気味に言つたジユールは俺が寝転がっているベッドの下にあるビニール袋らしきものを取り出した。

「まあ、キミの世界ではコレをビニール袋つて言つだネ？」

「ああ……」

若干引いた。どこまで調べたんだろう、俺達側の世界のこと。俺はポーカーフェイスを貫きながら何度も小ちく首を小さく縦に振つた。

「じゃあ、それをエリーの口元に当てながら……ああ、どっかで横にしてやつてくれ」

「OK、分かったネ」

ジユールはエリーの上半身を起こして、苦悶の表情を浮かべながら目を閉じている彼女の口元にそのビニール袋もじきを当て、そして・・・。

「ん？」

一瞬訳の分からなくなつた。あるう事が、ジユールはエリーを俺がねつこうがつていたベッドの開いているスペースに横にした・・・。

「何やつてるんだ？」

「ナニって、キミに言われたとおり、じつじたんだよ。ちゅうどここに手ごろなスペースがあつたからネ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

阿呆が、こいつは。どこかの頭のギア一個がショート起こしてゐる

奴なのか？こいつは、たぶん一番あってはいけないシチュエーションだよ、これ。

確かにこいつは幼女体型だ。はつきり言つて胸は小さいし、チビだ。しかし、こいつは一応俺と同年齢だ。それかそれ以下かもしれない。（たぶん……）

言わずとも分かるだろうが、いろいろといけないシチュエーションをこいつはものの数秒で作り上げてしまった。

改めてジユールと言う者は恐ろしい奴だと思った。焦燥感をあおられるようなシーンを、たったの一撃でギャグシーンに変えてしまつた。イレギュラーな奴なんだよ、つまり。雰囲気をぶち壊す事が大得意なわばムードブレイカーだったのだ。

俺は大きく溜め息を吐きながら、ジユールの方へ向き直つた。

「でもビックリしたヨ、キミには。左胸に確かに傷があったのに、銃弾らしき物は心臓横ストレス、何とか繋ぎとめたみたいだネ。いつたい何をしたんだダイ？」

「ああ・・・」

そういえば何かやつたな。そういえば・・・。

「あの男が銃弾を打つ前にほんの少し体をずらせて心臓から狙いを外させた。バレる可能性はあつたけど、あの時は一か八かの賭けだつたからな」

そして、俺はその賭けに勝つたというわけだ。さ、次は俺からの質問だ。とは言えども、俺が誤解している物は他にあるようだが、それよりも別のことだが気になつたから聞いておこう。

「なあ、ジユール」

「ナンダイ？」

「何でエリーは俺が言つた男の言葉でこんな状態になつたんだ？」

俺の質問があまりにも予想外だつたのか、ジユールはいつもの笑顔を一瞬にして消し去り、俺の目を細くして見つめてきて、その後、肩を落としながら目を閉じて大きく溜め息を吐いた。

「そうだネ。カレに遭つてるんだもんネ。しようがないつか・・・

「

ジユールはそう呟き気味に言つと、体を前に乗り出した。

「キミを襲つた」一人組みの男、キミが言つたゴツゴツ体型の男は、あの組織で「<sup>ウオライ</sup>W A R R A Y」と呼ばれている。「W」の称号を持つ、「W A R R A Y」だよ。そもそも、キミを襲つた男二人組みはある組織に入つていて、カノジョが言つには、その組織ではそれぞれ「A」～「Z」までの二十六のアルファベットでコードネームが振り分けられているね」

「ちょっと待て。彼女って、誰のことなんだ？」

「誰つて・・・」の子だよ

と、ジユールは俺の横で倒れているエリーの腕を叩いた。もしかして・・・。

「Hリー？」

ちょっと事態が余りよろしくない事だと思った。まさか、こいつもあいつらの仲間だつたって言つことか？

「そもそも、彼女がキミに名乗つた名前、「エリー」って言つのは本名じゃないんだ」

「へ？」

本名じゃない？じゃあ、なんだつたんだ？あの時に言つた、こいつは・・・。

「彼女はもともと組織に入つていた頃に「S」の称号を貰い受けて、「<sup>ショリー</sup>S H E L Y」って言われてたらしい。けど、エリーは何の理由か分からぬけど、組織を裏切つた。そして、あの組織から抜けたさい、彼女が最初に立ち寄つた場所で、「エリー」と、ただ名乗つたんだ

「ただ名乗つた？どういうことだ？」

聞いてばかりの俺にジユールは呆れたのか、大きく溜め息を吐いた。いや、ここまで来て知りたくないなんていう奴は変人レベルだ。・・・俺主觀だけど。

「言うなれば・・・」

ジユールは答えてくれた。

「彼女には、自分の「本名」って言う物の記憶がないんだヨ」

俺は病室の窓から外を眺めていた。外はすっかりの闇の黒であり、街灯だけが下を照らしていた。ここがパラレルワールドなんだと言ふことにいまいち実感がわかない。しつかりと下見をしなければ、そういう実感は出来ないだろう。見た目だけならば俺らの町と変わらない普通の普段着に着替えたので、見た目は何も問題は無いのだろうが、俺としては結構ダメージが残っている。しかし、足を打ち抜かれたというのに、それによつて生じた骨折があんまり感じられない。たぶん、この世界にある超科学とやらによつて、骨を接着したのだろう。

ほり、この時点では俺達側の世界ではありえないだろ? ま、おかげで見てみればなんとも無いが、痛みだけが残つてしまつていると言う奇異な状態になつてしまつていてるのだが。今ではまだ、歩くことはままならないだろう。

俺は吹き続ける風に当たりながら鼻で小さく息を吐いた。俺の吐いた小さな息は風によつてさらわれて消えてしまう。

彼女には、自分の「本名」って言う物の記憶がないんだ

(本名を覚えてない・・・か)

どんな実感なんだろうな。自分が何者か全然分からぬ。でも、それ以外のことがたくさん自分の頭の中に入つていく。それがどんな違和感なのか、俺でも想像ができない。恐らく、想像を絶するほど違和感なのだろう。俺は目をつぶり、ジユールの言つた言葉を思い返した。

「本名を覚えてない・・・だと?」

「ウン、それだけじゃない。自分の両親のこととか、組織に入る前の自分の過去とか、そう言う事丸々ネ」

俺は横で呼吸を落ち着かせてぐつすりと寝込んでいるエリーの寝顔を見つめた。とはいえた呼吸のテンポは結局速くまだ薄っすらと汗を搔いている。たぶん、俺が見た男達の夢を見てしまっているのだろう。

「なあ、ジユール」

「ン?」

「こいつのツンデレ性質って、そんな苦しみから自分を紛らわすためだって言うのか?」

「本人に聞きなよ」

「そうだな」

そうだ、俺はこいつの「素」を知る必要があるのかもしれない。「こいつをこんなにしてしまった様な奴だったのか?あの一人組みは」

「ウォライは多分そんなでも怖いんじゃないと思う。たぶん、もう一人の方だネ」

あのホワイトシルバーのロングヘアの男の事が。確かに、あの男の目やら、雰囲気が異常だった。今まで何人の人間を殺してきた、そんな目だ。冷たすぎる目だった。

俺がその男のことを思い出している時に、構わずジユールは続けた。

「その男のコードネームは、<sup>ジン</sup>ZIN。『Z』の称号を持つ、あの組織の幹部だヨ。<sup>カタストロフ</sup>性質も全くの謎。エリーから聞いたんだけど、その男は何人の数の人を殺してきたみたいだヨ。もしかしたら彼自身、殺した人間の顔何か覚えてないだろうネ」

「・・・・・・・・」

ああ・・・やつぱりあの雰囲気は、G.I.Nのものだつたんだな。今改めて実感した。新一が、G.I.Nのことをどんな風に思つていたのか。やっぱり、俺はどうあっても新一にはかなわないな。

「エリー・・・」

俺はエリーの顔をもう一度見やつた。こんな小さな体で、そんなでかい重荷を背負わされていたのか。

「でも、何でエリーがジンの事をこんなにも恐れるなんて、何があつたんだ？」

「知らないヨ。本人に聞いてみれば？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「そうだな。それが一番手っ取り早い。けど・・・。

「けど、聞かない方がいいよな」

「そうだネ。ボクもそういう風に思つてた。だから聞かない」

「ああ・・・」

「そうだ。知りたいなら、エリーがいつか自分から言つてくれるこ<sup>ト</sup>とを待つてやる。それが一番だ。

「・・・・・・・・・・・・・・」

俺はそんなことを回想しながら、片足を引きずりながらエリーが寝転がつている場所の横に立つた。もう呼吸はだいぶ落ち着いて、気持ちよさそうな寝顔を作つて、すうーすうーと寝息を立てていた。本来は俺が逆の立場なんだが、エリーが受けた苦しみを考えれば、俺がこういうポジションに立つているほうが正しいのだ。

俺はエリーの張りのある長い漆黒色に染まつた髪の毛の流れに沿つて、頭をなでて、その後、彼女のほんのりと赤みを帯びた頬を撫でてみた。

（六年・・・か）

そう、ジユールはエリーが組織から抜け出してきたのはちょうど

六年前だといっていた。こいつの苦しみはもう六年も続いていたと言ふわけだ。俺とエリーが抱える痛みの種類は似ている。しかし、こいつは六年。俺はたつた一年だ。格が違うすぎるし、スケールも違う。

(そういえば……)

俺がジンに出会ったとき、右目<sup>カタストロフ</sup>がうずいていたような気がした。あの時はたまたまそのタイミングでうずいていた、としか思つていなかつた。けど、改めて考え直したらあまりにもタイミングが出来すぎている。バラエティ番組でキャストがヤラセされているようなあんな感じだ。右目はエリー<sup>カタストロフ</sup>がいつていた紋章が浮かび上がつていた場所。もしかしたら、俺の性質<sup>カタストロフ</sup>とジンの性質<sup>カタストロフ</sup>は何らかの共鳴を起こしているのだろうか。もし、そうであるならばジンの性質<sup>カタストロフ</sup>も特殊性質<sup>カタストロフ</sup>って言う事になる。

「・・・・・・・・・・」

いや、でもここまでしか分からないな。俺がすぐに分かつた事なんだ。ジユール<sup>カタストロフ</sup>だって、ジンの性質<sup>カタストロフ</sup>は謎だつて言ってたしな。

「エリー・・・」

そうだ、俺はこいつに守られていると言つのなら、俺はエリーを守る。・・・・・いや、俺は監視されてるだけか。

鼻に消毒の匂いが突き刺さる。それがエリーの目覚め一発目で感じた感覚だ。エリーは薄つすらと目を開けて、目に入る光を感じながらゆづくりと呼吸した。

(何があつたんだっけ・・・昨日)

エリーが寝起きの頭でそんな思考をめぐらせた。

S H E L Y !

「一」

今ので一発で目が覚めた。自分の耳の中で響くジンの声の残響。

。 昨日からだ。 一真が、ジンと遭遇して襲われたと言い、その後・・・

エリーは激しい動悸を何とか押さえ、自分の覚醒した頭を動かして、その昨日のことを思い出した。

エリーはいつの間にやら寝ている間に掛けられていた白い掛け布団を掴んで自分からどかせ、上半身を起き上がらせた。

「・・・・・・・・・・・・

その後、その白い掛け布団を持ち上げ、しばらくそれを眺めた。 ようやく、昨日のことを全て思い出せた。 一真と友里の二人っきりのデートを陰から尾行して、そして、体中を銃弾によつて打ち抜かれた一真とともに、自分達側の世界に帰ってきた。

そして・・・・・・・・

（そつか・・・・・。 私、あの後過呼吸起こして倒れたんだ・・・・）  
そしてエリーはベッドの上に寝転がった。 そのあと、「はあ」と小さく溜め息を吐いた。

（何でだらり・・・・・。 なんで私、彼のことを思い出すと、変になるんだろう。 じばりく出てきてないと思つてたのに）  
覚醒したての頭の中で考え込んだ。

とは言えども、そんなことの原因なんて本当に分かりきつている。 分かりきつているのに考え方込んでしまつ。 しかし、それを否定できない。

彼が・・・ジンのことが純粹に「恐い」からだ。 ここにいるメンバーは知らない。 ジンの本当の恐ろしさを。 彼の前では、どんな人でも殺され、そこにいたという痕跡すら残してくれない。

そう、一真も、いつかそんな事になる。

残念だが、そのイメージしか、エリーの頭の中で浮かばなかつた。 これ以上、一真を彼らの組織に関わらせない方がいい。 しつかりと一真の性格を把握したとは限らない。 だが、だからと言って一真がこの組織の存在を知つて、この組織のことを深く勘ぐらないという事の保証なんてものはどこにも無い。

「あれ？」

今頃気付いた。ここに居なくてはいけない、一真がこの病室にいない。入院する際に着てている寝巻きがすぐそこにある椅子の上に丁寧にたたんで置かれていた。

（ま、骨も接着してあるし、そちら辺歩かせても大丈夫か……）

そんなことを思いつつHリーはベッドから立ち上がって、下に置いてあつたサンダルを履いて病室を出て行つた。

もちろん、どこかで足引きずつてほつつき歩いているバ<sub>バカズマ</sub>一真を探すために決まつている。

「ビニだ、二二二」

出てわざか数分して、道に迷つた、迷子の迷子の一真君である。

俺にしてはあまりにも計算しなさ過ぎた。携帯はおろか、GPS機能も使えないことをすっかり忘れていた。おまけにPLDはジユールに面手してもらつているため所持していない。ジユールいわく、エリーや他の人たちが触つたら大火傷するのは嚴重なプロテクトが掛かっているという可能性があるらしい。まだしつかりとした契約すらしていない俺が手を放すと誰かに悪用されてしまうという可能性があるからなのだろう、というのがジユールの見解だ。ちなみに、もう戦闘データは取られているので、正規の契約するのではなく遠くないだろう、という事も、ジユールの見解だ。

じゃあ、そのメンテが終わるまで町ふらふらしておひり、と思つたのが運のつき。受け取ろうと思つても帰り道が全く分からぬ。

メンテ終わるまでどこにも行かないよう――

と忠告されたのに、全く言つことを聞かなかつた悪い子の俺。どうする？

PLDが無いんじやあ、ジユールとも連絡が取れない。これぞ、正真正銘の迷子だ。聞いたところ

回りは日本語のようだから、聞いていけばいつかたどり着けるものだが、何せ相手はパラレルワールドの人間、聞くことに気が引けるのもこの実<sup>じつ</sup>……。

しかし、ここでパニックてしまえば余計帰り道が遠くなってしまう。

だから落ち着いて、さまよっていればいつかたどり着く。そう信じておこう。

たとえるなら東京の中央あたりに似ているこの町は、非常に熱い。もはやヒートアイランドだ。パラレルワールドと聞いて、ほぼ全部が相違点だとと思ったが、それでもない。逆にほぼ全部が同じ点だ。見たところ服装のセンスは俺達側の世界と何もかわらない。

そんなことを考えながらぼうっと歩いているうちに、いつの間にやら裏通りに入ってしまっているようだつた。さつきまでの情景とは違い、光が行き届きにくいうようだ。薄暗い道が真っ直ぐに続いていた。

「ま、探険するにはいい場所かな」

そう咳きながら俺は真っ直ぐに歩みを進め、暗闇に入つていった。いざとなつたら格闘で蹴散らすまでだからな。

しかし、わずか数歩歩いて入つて行つた後だろう、周りのガン睨む視線がそろそろ気になつてきたようだ。その人たちが着る服はおんぼろの継ぎ接ぎだつたり、オカルトマニアかと思わせるような服装を着ていた。そう、俺の服装はその中では余りにもおしゃれすぎたのだ。

そう思つた瞬間、人間の惨めな一面を見る羽目になつた。

「ボウヤ、こんなところで迷子になつたのかい？かわいそう」

「！」

ちょっとびっくりした。いきなり俺の目の前にオカルトマニア風の服を着た七十超えぐらいのばあさんが現れたもんだから仕方が無いよな。ちょっと引いた。

俺は後ずさりすると、後ろの気配にも気付いた。

振り向いてみると、筋肉ムキムキのスキンヘッドをした俺の身長を三十五センチぐらい超えている大男が立っていた。

それを決起に俺の周りにはどんどんこの通りの住民が集まつてくれる。

「…………」

俺はここでも自分を取り乱さず、冷静に周りの人数を数えた。

（一・二・三・・・・）

そのペースで数えてみると、俺の周りに集まつた群れの人数は合計で八人。どこぞのゲームの無茶振りかというぐらいの人数だった。

「あつ」

そういうえば忘れてた。俺、右足が思うように動かないんだった。すっかり忘れてた！桐ヶ谷一真、最大のピンチ！どうする？

そうこうとグズグズしている間にも周りの人間達は俺に一步一歩と歩み寄ってくる。片足が動かないんじやあ、俺のお得意の截拳道ジクンドを存分に發揮できない。さすがの俺でも利き足でもない左足のみでステップを踏みながら戦うなんて牛若丸じみた曲芸は出来ない。まさにピンチピンチピンチだ。

おとなしくボロられるか、それとも牛若丸のまねをするか……。そう決めあぐねていたときに、集団の隙間から一人の人影が見えた。

「お前達、そこで何してる？」

そう、俺が聞きなれている少女の声だった。  
集団の目が俺から一気にそっちに向いた。

漆黒の腰辺りまで伸びているロングヘアに、頭頂部から生えているアホ毛が特徴的な少女が、今ここに降臨したかのように、ずつりとそこに立っていた。

「エリー？」

俺がその名を呼ぶと同時に、ゴツイ体型の男がエリーにのつしのつしと近づいていった。

「小娘、何者だ？」

その男がドスの効いた声でエリーを威嚇すると、エリーは飘々とした態度で懐からP-SOを取り出してこれ見よがしに軽くそれを振った。

「P-P-Aだけど、何がある？」

その一言で十分といわせるほどに、俺の回りにいた人たちほぼおずおずと後ずさり、エリーと俺の間の道を作った。

その出来上がった道をエリーはずしづしと歩いて俺に近づき、呆れ顔を浮かべながら俺の手首を掴み、その通りを抜け出すためのルートを早歩きで通り過ぎていった。・・・俺の脚のダメージなんか全く気にしていない様子で。

「おい、エリー右足が痛いからそんな早く歩くなつて」

当にあの通りを過ぎたというのに、俺の腕を一向に離そつとしない。歩き方からして不機嫌極まりないようだ。

「エリー！」

俺のその怒鳴り声と共に、エリーはピタッと立ち止まって俺の手を放した後、バツと俺の方へ振り向いて腰に手を当てて、俺に顔を近づけた。

「もう一ど二行つてんのよ！ジユールにどこにも行くなつて言われてたでしょ！ジユールつたら、「カズマは？カズマはどこに居るんだイ！」つてうるさいったらありやしないんだからー！」

「・・・・・・・・・・・・

すまん、ジユール。俺がお前の言つことを素直に聞いていいばかりに・・・心配してくれてたんだな。あいつ・・・帰つたら謝ろう、マジで。

「もう・・・しかもよりによつて夜半の通りに入つていくなんて、

ウェルズロード

その好奇心、まるでガキそのものね

「・・・・・・・・・・・・

シンとするよつた態度をとつ、完全にそっぽを向いてしまつたエリー。

いつも俺なら何か言い返すだろうが。今のエリーのその言葉はまさに正論真っ当だ。反対意見なんかどこにも無い。

しかし……。

「いくらなんでも言い過ぎだろ、それは」

言い過ぎだ。これも真っ当な事だ。さて、ここから俺とエリーの口喧嘩がヒートアップする！

エリーは険しい顔を俺に向かへ、まるで猛犬その物になつたような表情になつた。

「言い過ぎつて何よ！別に言い過ぎじゃないでしょ！だいたい、ジユールの言ひことを素直に聞かないからあんな事になるんでしょうが！」

「ああ、そうだな。起きて一時間も待つて「カズマ、もうちょいまつてててネ」等と言われてしまつたらそりやあ、ジツとしてられないだろ？俺は人間そんな上手く出来ていないんだ」

「だからつて、度があるでしょ！毎回毎回人に迷惑掛けばっかりして！」

「迷惑？確かに今回は迷惑を掛けた。だが、いつも迷惑掛けてるのはお前達だろ？」

「はあ？」

「この数週間の間、だれが零れ物を回収したと思つてるんだ？」（ジャンク）

「・・・・・・・・・・・・」

「今回のことは借りの内の一つだ。昨日のことと合計したら、これでお互いはお互いで貸し借りになしになつた。俺が働いた分、しつかりと働いてもらわねば困る。ギブ＆テイクだよ、いわば」

「・・・・・・・・・・・・」

すっかりと口をつぐんでしまつたエリー。まあ、どう返していくる

?激昂シンデレ少女?

「もうーー真のバカ！馬鹿バカばかああーー！」

「悪いが、」の口喧嘩は俺の大逆転勝利だ

「くう・・・」しゃくな

俺の目の前で悔しさ一杯の涙を浮かべ、握りこぶしを握りワナワナと震えているヒリーを見て、ついつい噴出しそうになつた。

「ハイ、これ」

PPAの本部に戻つてこられた（ヒリーは悔しさで地団駄を踏みながらジユールの研究室から退場）俺は、ジユールから黒色のPLDを手渡された。ジユールが素手で触っている物だから、彼が言っていたプロテクトといわれる物は無事に外れたのだろう。

俺は手渡されたPLDを眺めた。以前と変わらない漆黒のPLDからはキラリと光る光沢が見えた。

「まずは、そのPLDに掛けられていたプロテクトの解除は無事に完了したネ。それと、キミのPLDの中に、リンクー、及びPPAのライセンスデータも入れておいたネ

「ライセンス？なんでだ？」

「ま、念のためだよ。それがあると、キミはパラレルワールド間を自由に行き来することが出来る。もちろん、ボクを通してネ。それに、威圧にもなるし」

「そうか・・・」

そうだったな。そいいえさつきヒリーが自分が、PPAだといつたら、あの集団もかなり恐れおののいていたな。

ああいう状況が成り立つてしまつた時に役に立つのだろ？

「ありがとう、ジユール」

「イヤア、何もやつてない『やるべき』ことをしただけだ『』」

「フンッ」

俺はうつすらと笑いを浮かべ、背を向けた。

（やるべきことだからやるだけ・・・か）

それは義務であり、自己的ではなく、命令的に・・・やりたいからやるのではない。やらなければいけないという強迫概念によって動かされ、とりあえずやっている。

どこぞの誰かさんにそつくりだな。

そんな事を思いながら、研究室から出ると・・・。

「うわお！」

まさかエリーがこんな入り口のすぐ傍で今か今かと俺が出てくるところを「待つてました」とか言つ姿勢で、待つていたとは思つてもいなかつた。

「むふふう」

何か満足げな笑顔を浮かべて俺の目を見ている。

・・・なんだ？何かあつてはいけないことが起きてしまつたのか？

「一真、P P Aになつたんだつて？」

「ん？」

ああ、そういうればライセンス取得したんだつけ？・・・あれ。

「ギブ＆テイク」

エリーが満足げにそういつた。その瞬間、俺の背中からトーンでもない量の冷や汗が流れ出し、背筋を凍らせた。

「これで、ギブ＆テイクは成立しないよね、か・ず・ま

「・・・・・・・・・・・・」

エリーは天子のような笑顔を浮かべながら首を傾け、いかにも自らが淑女であるかのようにアピールしながら、勝利宣言した。

「ゴクッと生唾を飲み込んだ。やばい・・・。あの戦いはまだ終わつていなかつたと言うのか？今日はこれにて、ジ・エンドって言うわけか？」

「これで貸し一返還ね？一真」

「・・・・・・・・・・・・」

くつそお、運に負けた。落胆しかないぞ？これ。解せないが、これは負けを素直に認めよう。エリーの強い運も立ててな。

「わかった。で、俺の借りつかつて返せねば……？」

「もう……」

そして、彼女は言った。

「これ以上私達に関わらないで……」

ただ、静かに、ジユールが聞いているかもしれないと言つこんな  
ところで、エリーは、静かに言つた。

—

俺の頭上に原始爆弾でも投下されてしまったのか？頭が凄い衝撃を受けたような感覚に見舞われ、頭がぐらついた。いきなりの言葉でも、爆弾発言にもほどがあるだろ？

何なよ  
しきなり

「そのままの意味。一真はこれ以上私達と開けわづちやいけない」  
簡単にそう単純に答えて来るエリーの真意が全く見えなかつた。  
じやあ、その真意を二三まで引き出すまごど。

「阿道」が「アーチー」。この二つは必然的

「たんだ」

いで。邪魔だから」

何とか「何を聞きだすことが出来たが、それが果たして真意かどうかが問題だ。理由が「邪魔だから」というだけが理由じゃないかもしね。もつと他にあるはずだ。もう少し勘ぐってみよう。

邪魔で言ふこと何があるだに」と

とか・・・「」・・・「」

「もうーとにかく開けられないでーー！」

怒鳴つた。呆れたよ、本当に。こいつのお得意スキル、「お話強制終了」。二つは今日会場で「歯をむかへ」二つとも二つ

エイテしていいといふを出して睨んだ。そこは……まあ、あんまり触れないでおこう。これ以上触れたらエリーがマジギレして爆発するに決まっている。それに今まで俺がこいつを無視し

てきた分のイライラもあるのだろうから、その威力と要つたら半端な威力ではないと思う。

俺は鼻で小さく溜め息を吐きながら後頭部をがりがりと搔いた。

「でもなあ、お前が言うように俺も一応 P.P.A.に入っちゃったんだし、関わるなつていわれてもどうしようもないだろう? もう十分深く入り込んでるし・・・」

もはや言い訳と言えるような言い分をした俺をエリーは「往生際が悪い」とか咳きながらそっぽを向いた。言葉だけを聞いてみれば、呆れたと言うような感じだが、エリーの手を見てみれば分かる。

右手で軽く握りこぶしを作つて、それが小刻みに震えていた。それで俺は確信した。

(こいつ・・・)

なんだかんだ毒ばっかり吐くものかと思つたら、こいつは俺を単純に自分がかつっていた組織のことを勘ぐつて欲しくないからだつた。エリーはさつき俺のことを「好奇心はがきその物」と言つていた。その俺の好奇心がこれ以上この事件に関わることであいつらのことを探してしまいかねないと思い、エリーは早めにその芽を摘もうとしたわけだ。自分が恐れているジンと言う男と関わらせたくない、俺を無理やりこの世界から突き放そうとしたわけだ。

「納得いくと思つか? んなもんで」

それで「はい、了解」なんぞいえるほど、この桐ヶ谷一真は上手く素直な人間に出来てないんだよ。

「悪いが、俺はここまで関わっちました以上、どうしようもない。今後のことはどうするか決めたい」

「でも!」

エリーがバツと振り向き、自分の胸に手を当てた。そんな表情してたのか。あまりにも咄嗟に見せた表情は内面的なものを与す、という物はこういうことか。心配してくれていたのか、こいつ。目尻が下がつて涙をこらえていると言うのが分かった。

そんな表情を見ても尚、俺は続けた。

「エリー、力の無い奴が力を求めないことは愚かしいことなんだ。けど・・・力のある奴が力を振るわないっていうことはもつと愚かしいことなんだ。だから、俺はここから抜ける気は無い。せつかく手に入れた力なんだ。俺はやらなければいけないんだ。俺は愚かしいことなんて事にはなりたくないからな」

「一真・・・」

エリーは俺の名前を呼ぶだけで、その後口を尖がらせて頬を赤らめて俯いた。その後は全くの無口。堅く口を開けてしまつた。俺はエリーを通り過ぎ際にエリーの肩をポンと叩いた。

「ジユールから聞いたぞ。お前、あの組織に入つてたみたいだな」「へ！？」

エリーはハツと顔を上げ、俺の目を見上げた。知られたくないことが知られ、自分から離れていつてしまうと言つ恐れを抱いているかのような目だった。

そんな表情を見て、俺は薄つすらと笑いを浮かべた。

「お前、見かけによらずタフじゃないよな。

いつ俺達がある組織に消されてしまうのかが分からない。だから恐くてしようがない。しかもそれが自分のせいだとしたら・・・。自分がその組織のメンバーだったと言うことがばれたら、みんな離れていつてしまうかもしれない。だから恐い、てか？」「・・・

エリーは涙をこらえながら、俯いてただ沈黙を守り続けていた。

「お前は友里そつくりだ。いつも何かに恐がつていてるくせにそれを周りに知られたくないから、いつも明るく振舞つたり、時にはデカイ態度を取つたりする。苦しいなら苦しいって言えばいいのにな。できる範囲なら協力なんていいくらでもしてやれるのにな」

その言葉と同時だつた。エリーが俺から背を向けて顔の辺りをシゴシとぬぐつた。

「？」

俺は首を傾げ、その謎の行動に対して疑問符を浮かべた。何して

るんだ？こいつ。

その後、エリーは俺の方へ振り向いて、口を「く」の字の形にして、いかにも睨んでいるかのような表情で俺の目を見つめてきた。

「何でかい事言つてんのよ！それで自分がかつこいいと思つてるわけ！？あんたなんかに協力してもらわなくたって、私だけでやることは出来るつづーの！」

「・・・・・・・・・・・・

お、みんなが知つてるエリーに戻つた。なんだか吹つ切れたのかな・・・・？ま、戻りすぎで、変な方向に言つて無ければいいけど・・・。

その後エリーは俺にほんの少し微笑みかけながら背を向けてすたすたと歩き去つていった。

そして、急転直下如く、事件は起きた。

このPPAの本部の廊下内だけたたましいアラートが鳴つた。こんなときでも何故か冷静になれる俺は異常なのだろうか。いや、待つてたのかもしれない。どうやら俺はいつか久しぶりに力を振るう日を待つっていたのかもしれない。戦いたくないと言う自分の本能がいつの間にやら「たまにだつたら戦いたい」と言う本能に挿げ替えられてしまつたらしく。

・・・つて言うか、これが敵の出現だということだということ決まりではないけどな。

俺とエリーが天井のアラートを鳴らしているスピーカーを見上げると、研究室からジユール<sup>ラボ</sup>が走り出てきた。明らかに焦燥感一杯の表情だ。

「エリー、カズマ。零れ物<sup>ジャンク</sup>が三体と、大量の鉄ぐず（イリーガル）がどうやらこの街に襲つてきたみたいだよ。気まぐれだから仕方が

無いけど、カズマも、協力して欲してくれないかナ？」

俺はエリーとジユールには分からないように、口元で薄つすらと笑いを浮かべた。

「ああ、分かつた。協力は惜しまない」

あれ？ そういえばさつき知らない語句が入つてたような・・・。

「なあ、鉄くず（イリーガル）ってなんだ？」

その俺の発言に対し、ジユールはキヨトンとしたような表情を浮かべ、じと目でエリーを見つめて溜め息を吐いた。見つめられたエリーは顔をゆがませて、額汗を浮かべた。

「鉄くず（イリーガル）って言つのは、零れ物の出来損ないジャンク手言つのが相応しいかナ？」

「零れ物の出来損ないジャンク？」つて、つまりゲームで言つとステージの上にいるエネミーのことか？」

「ン？ まあ、そういうことネ」

ジユールは顔に疑問符を浮かべながらも頷いた。つまりそういうことなのだろう。ならば、話は早い。リンクすれば俺の運動能力は極端に高くなる。

そう考えたら・・・。

「じゃあ、そいつらを片つ端から片付けて、零れ物をジャンク・・・て」

そういえば俺の右足つて・・・。

「カズマ」

「ん？」

「キミの右足・・・そろそろ痛みもなくなってるはずだヨ」

「へ？」

その言葉と共に俺はジンによつて打ち抜かれ、骨折していた足を浮かし、その後、足をトントンと落としてみた。

「あ、ホントだ」

思わず声が出た。凄い回復力だ。いつたい俺が寝て歩き回つている間に何があつたのかが分からぬ。そんな疑問一杯の顔を浮かべているのが分かつたのか、ジユールがそんな俺の疑問に答えた。

「キミの中にある性質を高速で体中を回して、キミの回復力を急激に早めていたんだよ」

「性質を回す？」

「ウン。そもそも性質つて言つのは血液みたいに体中を循環して回り続けているんだ。その中には生命、自然、超常エネルギーを体内に宿し、キミを回復させたのは生命エネルギー。性質の回転率によつて、それぞれのエネルギーが急激に上がる。ま、無理やり回転率上げてる状態だつたから、かなりリスクキーな行動だつたけど……。ま、保険はいくらでも掛けてたからネ。いまは完全に回復したから、もう通常通りだと想つけど……」

「そう……か  
もしそうだとしたらかなり便利な体になつてゐるんだな、俺の体は。

「よし、行こうか……」

もう心にエンジンが掛かつたな。そうと決まれば、本当に走つ端から切り倒せば言いだけか……。

俺が駆け出すると、後ろでエリーが「ジユール、行つて来る」という声が聞こえて、その後しばらくしてからエリーが俺の後をついて走つてくる足音がした。

「頼んだヨ、カズマ。エリーのこと」

ジユールだつて分かつていた。エリーは見かけによらずあんまりタフではないことを。だから、一人にしてはいけない。孤独にさせてしまつと、エリーはまたジンのことを思い出す。そんなことになつたら、今度こそエリーは壊れてしまうかもしれない。

だから……。

「頼んだヨ……カズマ」

もう一度同じ言葉を呟いた。

外に出てみると、地響きが鳴り響き、所々で黒煙が上がっている状態だつた。まさに、襲撃を受けていると言つ状態だつた。

「何でだ？ 何で境界を張らない！？」

「そうだ。境界を張ればこんなにも被害は出でていはないはずだ。

「この次元上自体が境界の膜に覆われているから、発動しようにも発動できないの。境界の上に境界は張れない。それに似たもどきの物を張ることは出来るけど、技の衝撃に耐えられないし、すぐに割れちゃう

「そうか・・・」

「それに、ここは他次元間の影響をもつとも強く受けてるから、いつ襲撃を受けるわ分からない。だからいつでもリンクできるようにしてるの。被害が大きくなる前にね」

「そうだったのか。じゃあ、ここにいる全員って・・・」

「そ、一応リンクして事になつて。P.L.Dがあれば境界内を自由に行き来できるし、どぞくさにまぎれて戦闘の間を逃げるしね」

「時間が止まって、影響を受けないんじゃなかつたのか？」

「動かないだけ、ダメージはしつかりと受けるし、破壊や真つ二つすることもできる。あの狼形の零れ物のときは一真が誰もいないとここに引き込んでくれてたから誰も死なずにすんだ」

「そうか・・・そういえばあの時は雨が降りかけていてしかも人はほとんど歩いていなかつた。あの女の子から離れていたんだ。工事現場のあたりは誰もいなかつた。だからエリーはあんな容赦なしに戦つっていたのか。

しかし、あの時もし人が周りにいたのなら、こいつは少々手加減して戦つていたって言うことか。じゃないと、周りの人間まで危害が及ぶ。ノーガードのところに斬撃が加わればとんでもないことに

なることはまず間違いない。動けなければいけない。

「そ、うか・・・ここに居る人たちみんなは動けるから逃げられる。つまり、思いつきり戦えるって言つことか」

「そ、うこ、う」と

エリーと俺は笑いを浮かべながら互いの表情を見詰め合った。俺は懐にしまいこんでいたPLDを取り出した。それを腕に当てる

と、PLDからバンドが出現し、俺の腕に巻きついた。

「片つ端から片してやるよ」

俺はPLDのレバーを引いた。

Link START

俺の頭の中でリンクしたときのあの機械音声が聞こえた。右耳にもたぶん紋章が浮かんでいるはずだ。

俺がリンクしたとき、隣でエリーが呟いた。

CODE WIND

エリーの体が風に纏われ、エリーの髪の色が空色に変化し、瞳の色もこげ茶色から髪の毛と同色になった。この力が、エリーの代名詞その物だ。

その後、エリーは俺の方へ振り向いたと思ったら、俺にウインクを投げかけた。

ん? 何かたくさんでるのか?

「じゃあ、お先に」

「?

その瞬間、エリーが被害が出ている方向に目を向けると、ブワッ！と強い空風が出てきたと思ったら、気付いたらエリーがない！？

「あれ？どこ行った？」

ああ・・・そういうえばエリーが風のコードを宣言すると、スピード特化型になるんだつたけ？いつも「火」しか使わないから忘れていた。

つて、言つてる場合か！

あいつ一人にさせても大丈夫なのか！？援護射撃ぐらいしてやらなければいけない。さつきエリーが向かつていった方向に行けば会えるはずだ。ジャンプでの建物の上に建てるかな。

見たところその建物は二十メートルぐらいの大きさ。あの時飛んだ高さは多分三十メートルちょっと。じゃあ、余裕で飛び乗れる。俺は両足に力をいれ、高く飛び上がった。通常では到底考えられないジャンプを、リンクすれば可能になる。

「ゴウッ！」と言つ音と共に俺の体が宙を飛んだ。屋上のフロансを余裕で飛び越え、屋上の上に立てた。

「あそこか・・・」

俺が見た先の黒煙は、風に巻かれるようになびいていた。きっとあそこでエリーが鉄くず（イリーガル）相手に暴れまわっているはずだ。

あの暴れ様から観て尋常じゃないな・・・。周りホントに人ないのか？いたら大変だぞ？

（大惨事になる前に早く行こう）

そう思つたとき、俺のＰＬＤから声が聞こえた。

『カズマ』

『ジユールか』

何のようなんだろ？あいつらを片つ端から片付ければいいはずなんだが・・・。

「何だよ」

『カズマ、エリーを一人にしないでくれ』

「ん？」

つて言つか、もうあいつ一人でいたんだけど……。

『今のエリーは凄い不安定なんだ。表向きはあんなでも、多分一人ぼっちにさせてしまうとまた陣のことを思い出してしまうかもしれない。だから、一緒にいてやつてくれないカイ？カズマ』

「…………」

言われなくても分かっていることだ。あいつはまだ不安定だ。人にさせてはいけないことぐらい、十分に分かっている。

「分かつたよ……。エリーからは離れないよ」

『助かるネ』

ジユールと俺の回線はそれで途切れた。エリーは多分あそこで戦っている。ガラスの心になつている彼女は今も尚あそこで戦つている。

(エリー……)

俺はほんの小さく呟いた後、フェンスを飛び越え、建物の間を軽く飛び越え、そのエリーが暴れている場所に近づいていった。

S H E L Y · · · !

「クッ！」

まだ。こんな鉄くず（イリーガル）に囲まれていると言つときにジンの声がエリーの耳の中で響いた。体を凍りつかせ締め上げてしまう。

一人になると、ジンのあのときの冷たい声が聞こえる。それだけで、動きが鈍つてくる。

(何で？何で？何で、あの組織は私を逃してくれないの？何で、彼はいつまでも私の中にいるの？)

S H E L Y · · ·  
S H E L Y · · ·  
S H E L Y · · ·

S H E L Y !

「くつーうあああああ！」

だめだった。どれだけ一真が強い表情を見せても、どれだけ一真がいい言葉を言つても、どれもジンによつて塗りつぶされてしまう。あの冷たい声、冷たい笑いが一真を食いつくす。

(嫌、嫌、嫌アア！)

風が、周りの鉄ぐず（イリーガル）を巻き込み、切り裂き、バラにしていった。完全な性質の暴走だ。

もしかしたらこうしている間にも、ジンが現れて、自分を殺すかもしれない。一真を殺すかもしれない。あの凶殺者は狙つた標的は殺すまで追い続ける。

だから、早く来て欲しい。

毒舌家で、皮肉屋の探偵気取りのあの馬鹿に会いたい。

あつて、安心させて欲しい。

(一真・・・一真・・・一真！－)

「一真ああああ！－」

エリーはその少年の名前を叫んだ。いて貰わないとおかしくなつてしまいそうだ。ジンのイメージを、彼は打ち消してくれる。だから、叫んだ。すると、エリーの髪の毛の色が赤色に変わった。目の色も空色から赤色に変化し、何も宣言した覚えもないのに、勝手に自分の体内の属性が「火」に変わった。

じぶんの本質の性質<sup>カタストロフ</sup>、「火」が発動した。

「Hリー・・・」

さつき、俺を呼んだのか？あいつは。だつたら相当やばい。あのあいつがそれだけピンチつて事だ。零れ物<sup>ジャンク</sup>か、それとももつと違う奴か・・・。

「ツ！」

俺の目の前にある黒煙から、火の渦が発生し、煙を食らい尽くしていつっていた。たぶん、エリーが「火」のコードを使つたんだ。しかもあの炎の暴れっぷりからして、もつ半暴走状態。

「ジユール、あれはまさか」

『ウン、エリーが暴走してる。多分、ジンを思い出しているんだろネ。カズマ、早くエリーの傍に!』

「ああ・・・」

俺は建物の間を飛翔して、飛び越え、確かにその黒煙が上がっている場所に近づいていた。

(チツ、世話の焼ける!)

俺はそう毒づきながらも、エリーがいる場所に近づいていった。

動悸が激しい。息が苦しい。頭が真っ白になる。そんな感覚の中で、エリーの性質<sup>カタストロフ</sup>は暴走していた。火を撒き散らし、周りの建物を破壊してしまっていた。ジンにあそこにいた事がばれたかもしれない、そして、彼が殺し損ねた一真諸共全員を抹殺しに来るかもしれない。そんな感情を暴走によつて表していた。

(一真、どこ。一真、どこ!)

何故か分からぬ。何故、こんなに自分が一真にこだわるのか。全然分からぬ。存在していなかもしれない少年、桐ヶ谷一真をエリーは求めていた。傍にいて欲しい。じゃないと壊れる。

「エリー!」

その声と共に、エリーの手が握られた。よく聞き覚えのある少年の声。今一番会いたかった少年の声だった。

「一真・・・」

エリーがそう口にすると、動機がどんどん静まつていく。バクバクとした心臓の鼓動がどんどん、トクン、トクンといつ小さな鼓動に收まり、気が沈んで落ち着いてくる。

エリーは涙をこらえるよづて口の形を「へ」の字に変え、怒鳴つた。

「馬鹿！遅い！」

「遅いって・・・お前が速かつただけだろ？。いきなりコードウインドとか使って颶爽せつそうと俺の目の前から消えてるし・・・。勝手に突っ込んで勝手に暴走して勝手に泣いてるんじゃねえぞ。世話の焼ける・・・」

最後にほんの少しエリーを毒づいた一真。やつぱり本物の一真だ。何も心配する必要なんかない。一真是ここに存在している。そう確信したエリーは一真から顔を背けて口元で薄つすらと笑いを浮かべた。

（こんなに大きくなつてたんだ。一真的存在つて・・・  
ほんの少し一緒にいただけなのに、一真的存在が大きくなつている事を、初めて実感できた。

（たく・・・世話掛かつたあ・・・）

あんなに暴走しているとは思つていなかつた。おかげで周りの建物の半分がどつかにぶつ飛んでいるという、あんまり笑えない状態となつていた。

とは言えども・・・。

（こいつら、どこから沸いてくるんだ？）

多分エリーが暴れた分、かなりの数の鉄くず（イリーガル）は減つているのだろう。しかし、それを差し引いても、まだ周りに三桁単位の数の鉄くず（イリーガル）が湧いて出てきていた。人型のロボットだつたり、モンスターみたいな奴だつたりと、いかにもゲームではエネミーの役を買つていると言つ奴らばかりだ。

「一真

「ああ・・・」

「私の背中、任せるとどうだな」

俺とエリーは互いを背中合わせに立ち、大量の鉄ぐず（イリーガル）の前に構えた。

「代わりに・・・」

「なに？」

「俺の背中はお前に任せつからな。これでギブ＆テイクだろ？」

「調子のいい事言つて」

そのエリーの声からは微かに力強さと、信頼という感情が滲んでいた。

今ここいつなら大丈夫だ。俺の背中をませられるな。

ノイズが集まるようなエフェクト共に、俺の右手に交互に白と黒の微かな光<sup>波動</sup>を放ち、表裏<sup>ひょうり</sup>がそろつたような黒い刃紋を持つおれの腰辺りまでの長さのある銘無しの片手剣が握られた。

## CODE CRIMSON

エリーの呟き声が聞こえた。コードクリムゾン。エリーが今まで本気を出す時に宣言するコードだ。クリムゾン、即ち紅、「紅焰」だ。

俺の後ろで炎が上がった。炎がエリーの体を包み込む。エリーの紅蓮色の染まつた髪の毛の周りにパチパチと火の粉が飛び散る。体内から漏れ出すほどの性質の量<sup>カタストロフ</sup>。ある意味、俺より潜在能力性は高いかもしれない。俺は口元で笑みを浮かべながら、目の前百八十度の鉄ぐず（イリーガル）どもを見据えた。

波打つ黒い刃紋に俺の顔が鏡のように映る。

その瞬間、周りの鉄ぐず（イリーガル）が俺とエリーに飛び掛かつてきた。

「ツ！」

俺は短い霸氣と共に、剣を振った。まずはやるべき」とは一番近い敵を切り捨てる事だ。俺が降った剣の中腹がちょうどモンスター型のイリーガルを無造作に切り捨て、横に一つに分けさせた。すると、零れ物<sup>ジャンク</sup>と同じように切断面が青く光つており、そこからひびが入ったような、感じで青い光が鉄くず（イリーガル）の体を駆け巡った。

飛んだ上半身は地面に叩きつけられた時に、残った下半身は地面に倒れこんだとき、それぞれはバキリッ！！という大きな破碎音と共にバラバラに砕け散り、その後上空に飛び交った粒子は数秒もない内に消滅した。

しかし、敵は次々とやってくる。

ソニックブレイドは単発だからいつせいに倒せてもせいぜい五、六体。ヘイトフレームとダイヤモンドソニックは発動してから発射まで時間がかかる。実際、エリーは使っていない。目の前の敵を一体一体順番に自分の持っている太刀で切り倒していく。

「クソ、エリー。何か技ないのか？」

「はあ？」

「技だよ！ 技！ この周りの奴を一気に一掃出来るとつておきの技！」

「まさか、一真！ ハピーしようっての！？」

「それ以外何がある！ 一気に片して、早く零れ物<sup>ジャンク</sup>も片すんだよ！」

今回は三体！ もしかしたら他の奴もその一体と戦っているかも知れない！ それまだまだつかの鉄くず（イリーガル）の相手してたる途中かもしれないんだぞ！ だったら俺達がやることは、手取り早くこいつらを片すことだ。だから、エリー！ 何か使ってくれ！」

俺とエリーは周りから襲い来るイリーガルを切り倒していくながら、その合間を縫つて言葉を交わした。こんだけ倒していくてもまだどうつかから湧いて出てきてやがる。

エリーは目の前の敵を切り倒して、少々考え込むように下を向い

た。何か心当たりがありそうだ。

「あるつむやあるけど……」

「…………」

「一真も巻き込むかもしない！だから使えない！」

「…………」

エリーは必死でこんな騒がしい状況の中で、俺に意思を伝えるような表情出して、そう言つた。

俺も巻き込む……か。そう考えたらかなりの威力でかなりの広範囲なのだろう。確かにそうだったら、俺も向こう行きだ。だが……。

「けど、こんだけの数をとつとと戻付けるには、俺とエリーがデカイ範囲の技を使う必要がある！」

それでも、エリーはただ目の前の敵を見据え、それでもチラッと俺を見やつた。本当にしていいかもよつているのだろう。こいつに使ってもらわなければ、俺、だつて生きていけない。生きていける自身がない。どうせ死ぬのなら、生きる可能性があるほうを選ぶんだ。「大丈夫だ！エリー。タイミングさえ分かれれば俺はお前の攻撃をかわせる！だから、使うんだ！」

俺は敵を切り倒すぞさくさのタイミングの中で叫んだ。しばらくすると、敵の軍団の攻撃が止み、にらみ合ひの状態になった。

「一真……」

エリーは俺のさつきのその言葉に俺の顔を横目で見やり、その後下に俯いて目を閉じた。

「分かつた。だつたら信じる。一真のこと」

そして、エリーは俺のほうに振り向き、俺の目を強い目で見つめた。赤い瞳の奥にある炎がかすかに視認できる。

「私が発動するタイミングをうつから、高く飛び上がつて

「ああ……了解」

俺は口元で笑いを浮かべ、目の前の敵を見据えた。今俺のやるべきことは、エリーの技を発動させること。その発動している間はや

つぱり極端にノーガードになる。俺はそのエリーを守らなければいけない。

エリーは俺の後ろで、ふうと息を吐き、目をつぶった。エリーの持つ太刀に帶びる紅蓮の焰が小さく、激しく燃え上がる。たぶん、あの焰のサイズがどんどんと大きくなつていくのだろう。

俺はそのエリーの姿をチラッと見やりながら、周りの俺とエリーを襲つてくる敵を叩き切つていた。

そのうちに、俺の背後が熱くなる。燃え尽きてしまってどうなぐらい熱い。背後を覗いてみると、エリーが持つ太刀に帶びた炎がいつの間にか大きくなりそれが十字を作っていた。

「一真！飛んで！」

「フ・・・」

俺は口元で笑みを浮かべ、両足に力を入れて、飛び上がった。俺の体は一気に三十メートルちょっと飛び上がり、エリーの体が小さく見えた。もちろん、エリーが発動する技も見逃さない。俺の右目で見た技はコピーして、俺の技として扱うことが出来る。エリーの握つた太刀から放たれる十字型の紅蓮の焰が振るわれる。

## クリムゾンクロス

俺の頭に確かに聞こえた、その技名。俺はその技を確かに視認した。

十字型に紅蓮の焰はエリーの周りの鉄くず（イリーガル）をなぎ倒し、直撃を受けた敵の体に、紅蓮色の炎が燃え移り、それが体を喰らい死くす。

二十メートル上の俺の耳にも聞こえた。炎が消えず、苦しみもだえる鉄くず（イリーガル）たちの断末魔のよつな悲鳴が。口や理屈では到底説明できない。

しかし、その断末魔に心が動かされない。人が殺される時、その断末魔を聞くなら、俺の心は大きく動かされるのだろう。たとえ、殺人犯でもだ。しかし、相手は人外、鉄くず（イリーガル）だ。たくさんの人たちが恐怖し、それを追い込み殺す。しかも相手は人間の法とかそんなの無視だ。だったら、押さえ込むしかない……のだろうか。今はあんまり迷いたくないし、考えたくない。

俺の体が地面に着地した。二十メートルも高くから足で着地した。その衝撃でたぶん足が持つてかかるだろうが、リンクしているから、そういうことは起きない。スタンツと静かに着地して周りを見渡した。

「すげえな……」

俺の周りにいた敵の大半数が一気に根こそぎ消えている。あの一撃で、あれだけの敵を一気に倒したって言うことだ。

じゃあ、今度は俺の番だ。

その瞬間、俺の意識が体から切り離された。

## クリムゾンクロス

俺の頭はそう言った。その言葉にエリーが気づき、はっと俺のほうへ振り向いた。俺の持つ片手剣から紅蓮の炎が発生し、それが激しく、しばらくしてから大きくなりそれが十字型になつた。俺の体はエリーと同じように、目の前百八十度に存在する敵全てをなぎ倒して、かすつた敵には、炎が残り体を食い尽くした。断末魔、叫び声、もだえ声が聞こえる。敵の叫び声が消えるたびにバキリッ！！！という破碎音が聞こえ、青い粒子が上空を舞い、そして消えていく。俺の意識がようやく体に戻つた。手足の自由を実感しながら、俺の握る片手剣を眺めた。さつき出てきた紅蓮の焰は完全に消えさせ、また、白と黒の小さい光が交互に刀身を輝かせていて。

便利な能力だ。戦えれば戦うほど強くなつていいくタイプの性質なんだよな。「天」の性質は。

俺はエリーのほうへ振り向き、口元でうつすらと笑いを浮かべながら、さつきのエリーと同じじよにウインクを浮かべた。

エリーは俺の表情を読み取り、頬を赤く紅潮させる。あれ？ 变なスイッチ入れたかな？

そんな変なスイッチが入つたであろうエリー本人は俺からぱいつとそっぽを向き、俺の背後の敵の方向を見た。さつきの俺の一撃で、俺の目の前の敵の数はホントに微々たる物だ。もう、わざわざクリムゾンクロスを放つまでも無い。ソーツクブレイドを連續使用していくつて、片していくのが一番セーフティで確実だ。ま、エリーの方に向に居る敵はまだ結構居るからまたクリムゾンクロスを放つかもしれないから、エリーからは離れなければいけないしな。

「もうちょいだな、エリー」

「・・・・・・・・・・・・・・

「エリー？」

「ふへ？・・・う、うん」

俺はエリーと背中合わせだから表情が分からぬ。けど、なんか集中を欠いているようだつた。死ぬ気か？ こいつ。なんだかこいつが集中を欠くなんて珍しいな。

なんだか体が熱い。動悸が激しくなる。しかしエリーはまだこの感覚に浸つていたかつた。言葉でだけで言うどジンのことを思い出した時と同じような感覚のはずだ。しかし、一真のあの顔を見たときに出た動悸は何だか違う。人が違うだけでこんなにも違うのか、とも思った。ほんのりと体が熱い。

その感覚に浸りながら、エリーは田の前の敵に集中した。今実感できた。今時分の背中には、一真が居る。一真が居る限り、自分の

背中は大丈夫。そう実感できた。一真も同じ事思つてゐるはずだ。

エリーが背中に居る限り、背中は大丈夫だつて言つこと。ようやく、エリーも会いたかつたパートナーに会えたと思えた。

（居たよ、ANCHEI。あなた以外でも私の背中を任せられるパートナーが）

エリーはある時の男の顔を浮かべながら、自分の握る太刀を構えた。彼が付けてくれた「銀焰ぎんえん」と言う銘を受けた太刀を・・・。

## ソニックブレイド

俺の体は超高速で最後の鉄ぐず（イリーガル）の合間をつめ、逆手で持つている高速振動をしていてる片手剣でいつきに真つ二つにした。

これで俺サイドに居る敵は全部片付けたはずだ。  
さて、エリーのほうは・・・。

と思って俺は最後の敵の破碎すら見送らず、エリーの方へ振り向いてみると、案の定、エリーのほうも全部片付けられたようだ。イリーガルが消えた後なのだろう、残り火が微かに残つて、エリーはそこに君臨しているかのように立つていた。

エリーはそんな状況の中で俺のほうへ振り向き、ツンとした表情を浮かべていた。

「やるじゃん・・・」

俺がそういうとエリーは表情をほころばせ、笑いを浮かべた。

「そつちこそ」

俺はエリーの横に立ち、そのエリーが残した残り火を見据えた。

これで、最後は零れ物だけだ。早く片付けて事件を収束してやろう。

俺はPLDに田を落とした。そういうえば、どうやって通信するんだろう。そう思ってたところHリーが俺の横でPLDに何かの操作をした。

「ジユール、零れ物どこ？」

『ウン、キミたちの位置から八時の方に向三五百メートルぐらいに一  
体いる。そのほかのジャンクや鉄くず（イリー、ガル）他のメンバー  
で当ただから、キミたちはさつき言つた零れ物を回収してきて』

「うん、わかった

そう言つてエリーは俺に田配せをした。どうやら建物飛び越え、  
まっすぐに突っ込むつもりだ。

『じゃあ、頼んだヨ。仲良し夫婦さん？』

「ば・・・ばかあああ！！！」

エリーのその怒鳴り声が俺の耳の中で「コウン、コウン」と響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5464y/>

アリアドネの銀弾?【発端】

2012年1月10日23時44分発行